



清俗紀聞

第四

御帙

卷之六 生誕

卷之七 冠禮

卷之八 婚禮

ヨウ  
2773  
4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

清俗紀聞卷之六

生誕

生誕

○久婦人家ひ事あひて四月五日月経止諸縁沙汰本錦の額を以て一帽長  
其人の肥瘦小應ト肚帶成脇量造と股み生を活び平日身を安靜みて  
勞せば或る重き物を持又ハ高め少く成上あせぬやうに心をすらひ  
食事も隨分淡薄みて胎内を平らに保てし事あふよモ穩婆一枚生  
を以て三日五日間み脇成按摸せしむ○臨月みなれば草紙襍強を用意  
あまき氣はれども床の上み褥子を補安外て穩婆み脇を擣<sup>タマフ</sup>て  
産ふ際<sup>タマフ</sup>もとと穩婆腰を取時刻を考へて力成添<sup>タマフ</sup>てむ産房<sup>タマフ</sup>を  
穏波女小児を取上手足筋肉を汲免竹籠を以て胎衣を切脅帶の切筋  
銷ゆく際<sup>タマフ</sup>もとと包み脇み茎<sup>タマフ</sup>を正す草湯を以て嬰兒を

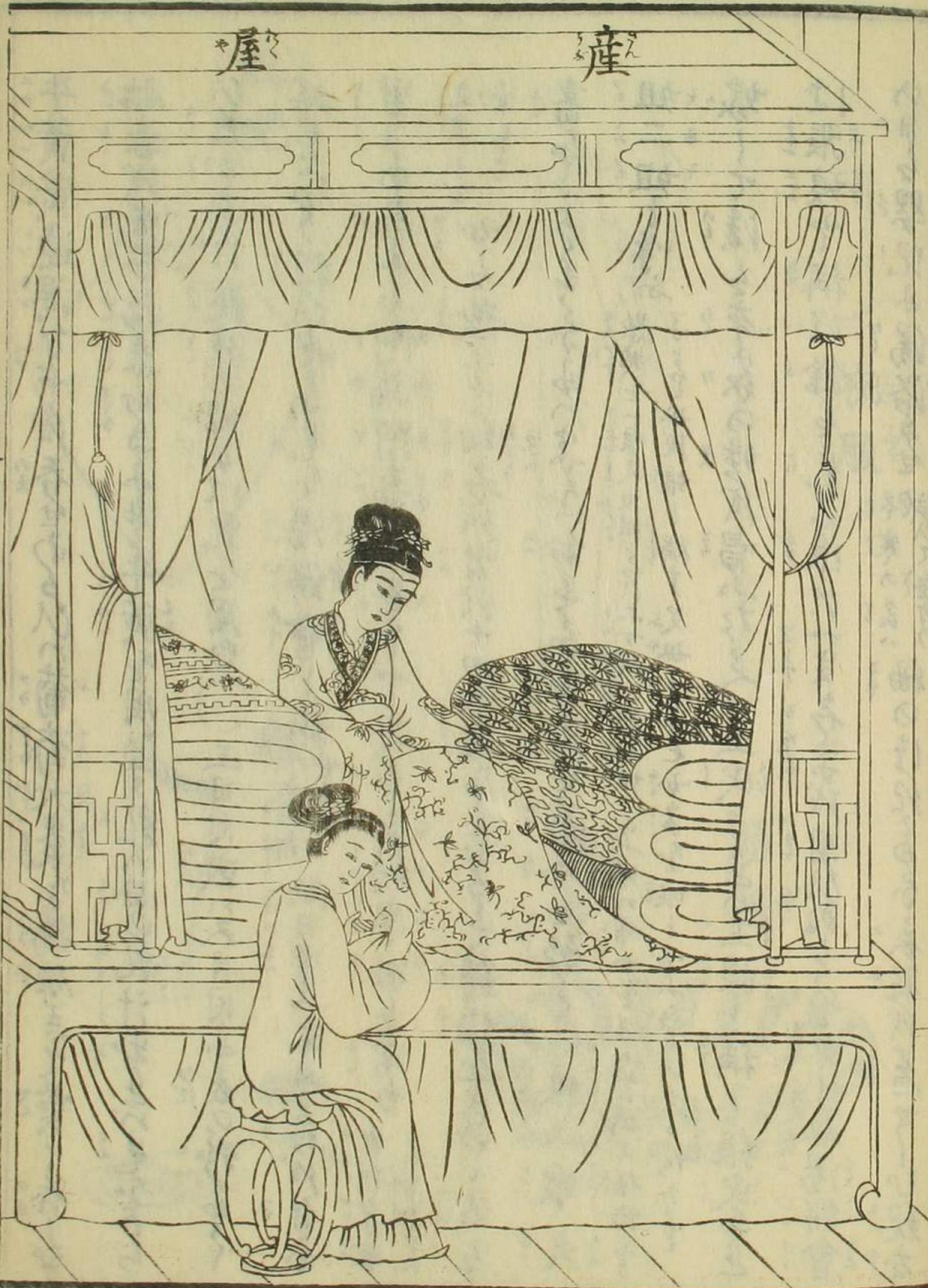
あらぬ一のみ洗ひにゆみ抱代入て瘀血等を洗ひ出し 舌辨をよく拭ひ  
綿わらひの箇切を以てはくみ上り襟襫ゆくほほ人の懷中に横みて抱  
高免玉母を産屋み一み産臺至らむ産臺の常の床は上み左右襟子成敷  
多積がゆ中み臍辨の動くぬやす安坐せり先多く十日或七八日後も平  
外せしめ血暈たされば五六日多く平外すかもあらず産臺み坐して早速  
襦木の粥を吃せしむを以てはくみ多分食せぬやす毎時坐てば食せ  
しむ襦木粥と多く一度みて其處の飯を食せ三十日の内に魚肉油物を  
忌五七日の内に姜辛酸味忌又七日多く酸味を少しば吃せしむ七日乃  
間の砂糖汁ゆく益母草成羹で飲へる毎度瘀血を去る血暈なれど  
湯葉を用ひて産臺み坐る内に老女阿媽の敷寝夜漏漏産婦の歎をさ  
まび解を片付せぬす且風寒を受てゆくみをうけ家内も物語め  
高齢あるべく物育の櫻葉等成禁禁じ先隨き産婦の乳代靜か安寝し保  
生長すかゆに公掛かひと ○ 胎衣ハ少く磁器に入て蓋を覆ひよく包  
居宅の内潔淨すか空地を深き三四尺程より埋て並て遠動くさむ  
すつみつじあら埋ひ竹の方位并み添物等の辛す一昔時古儀を文入  
埋ふ就あと高時折く用ひと ○ 嬰兒死後すれり耳鼻湯み食鹽を  
すこ入よくかだす勞小こもあらみ入く洗ふ只血汚を去まで非あらず  
みあらひ畢まで膩粉を細末みて懶身に擦並襟襫ゆくも膩粉へ湿氣  
濟帶ハ切くよく切口也箇みて縫ひ包み脇み當く外を縫切みて參と並み六  
回もあら箇切代解く乾不乾を見て乾た止ばれのうし縫く脇の肉に入る其  
時縫切をも内す 細筆を切み長さくす後残り切る若長  
○ 嬰兒み乳を付ふ事は四時を行く乳汁を呑む一昼夜みそと其あひご  
る

屋

産

生誕

三



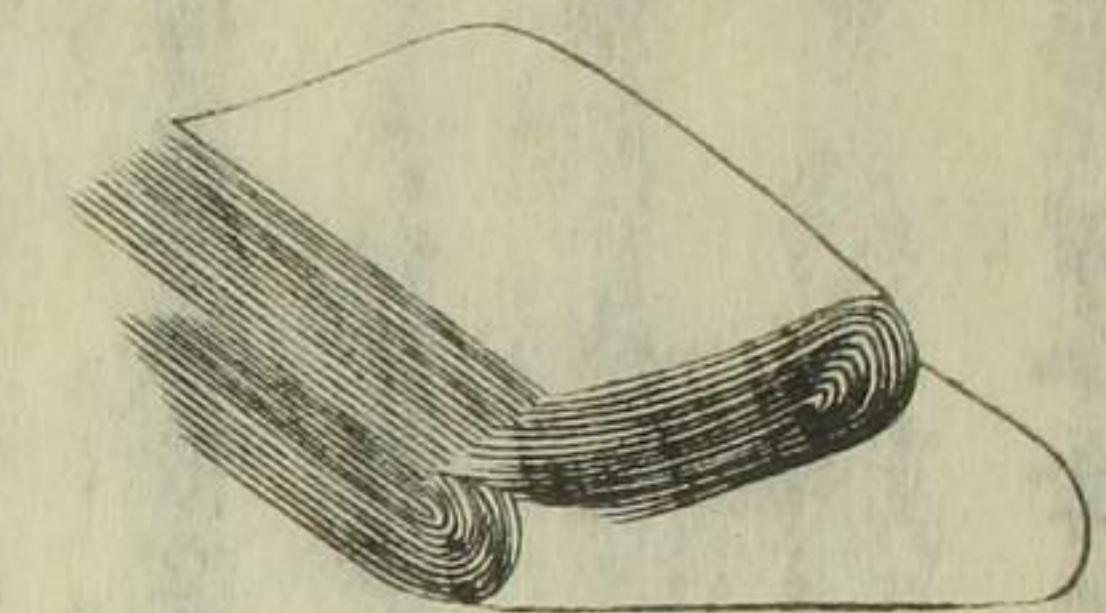
褓  
襁



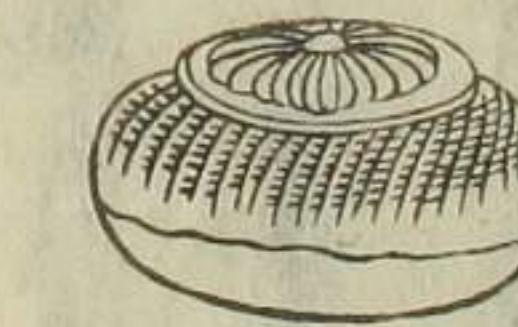
肚  
帶

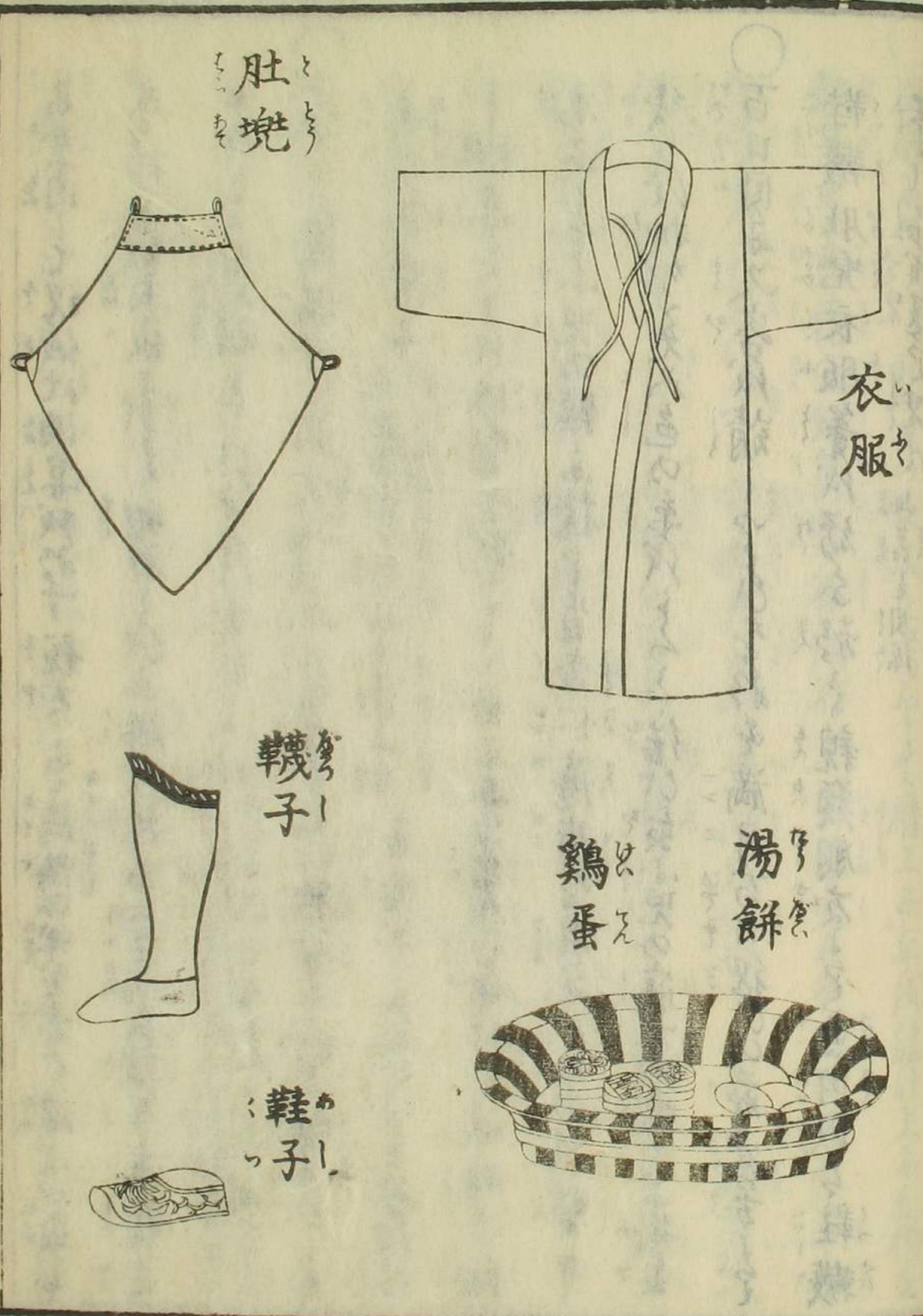


草  
紙



胎  
衣  
器





生美

四

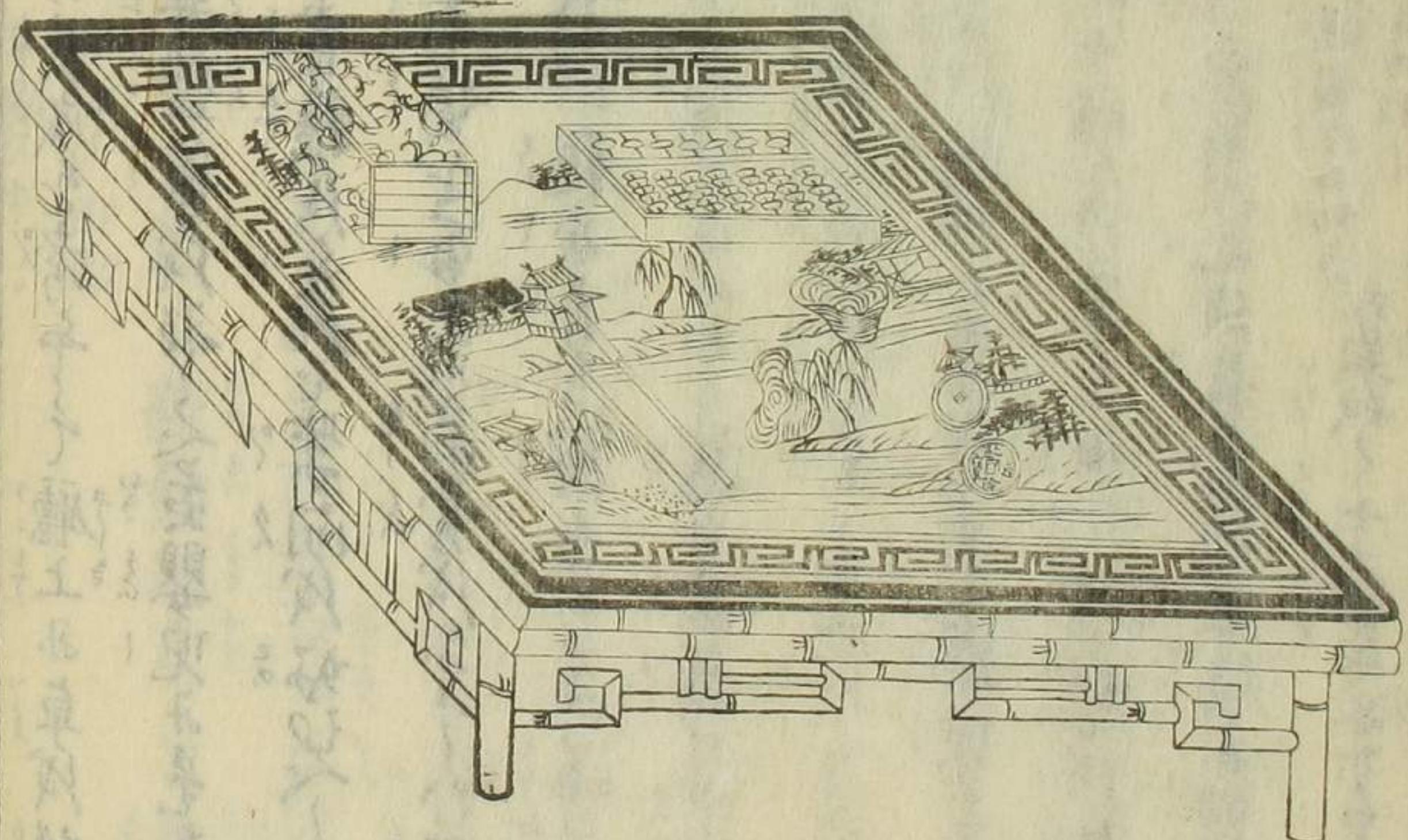
牛黃黃連湯をすく呑せあらひへ葡萄大棗を搗碎きて羹じ呑む  
胎毒成きか抗毒ゆきか牛黃を用ひす乳の母の乳汁出止ば是をやら  
ひ美生子とへ親族の婦女に乳を用ひ○三日同或ひ又日同小麦の粉ゆく  
縄を作り縫ひそよか是を湯餅會と云ふ一み三朝此日男ふみ多る有難事  
男子の名ふら阿福阿壽官哥ちよつと吉利字眼を用ひ吉利字眼  
文字と云ふ女より懇して幼名成貧び十四又歳もむむと詩作をまつて或と  
書ふよくよくかゆの字を命ふまつて其外と称く一娘二娘大  
姐二姐と呼ぶ懶頤を一娘又大姐と云ニ女成二娘ニ姐とよ娘の婦女を不<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>稱の俗語也  
子とも母娘と稱す又母も娘と女を娘と呼ふ愛めちむねから  
嫁して後々辛家姓成唱ふたゞへ王氏をよしとへ王娘と稱へ張氏をよ  
は張娘や稱ほ餘を先ふ準備へ一生名字未聞ひぬとひ多<sup>シ</sup>此湯餅會  
の間<sup>ハ</sup>嬰兒が湯浴を終<sup>ス</sup>寒の衣<sup>ハ</sup>モ<sup>リ</sup>袖のほたるる衣服成着せしむ親友

み妻内して祝儀に酒宴成程す親なると鷄鳴の卵を赤く塗三ツ或も  
五つ打るが妻家よりと卵形のみ拂成程ふ立清衣類等を親女  
子うどと三朝までのわらひ奉り此後之物を雙方とも自用を以て用ひす  
三十日因成滿月と云ふ(一)此日男女ともに胎髪を剃て湯浴せしを  
壽星菩薩承(二)壽星菩薩は布袋の寺院み安第福せし妻家内と寔成程  
百日因み又寔成請一つをひを終を満月百日祝ひの節密方とも  
未みて小児の頭ふ擣と至杏仁薄荷を用ふもあて胎髪半  
纏じて押かえ色の糸成とて結び至小児の寝不れ帳内め掛呈  
百日因み又寔成請一つをひを終を満月百日祝ひの節密方とも  
鞋鞆肚兜衣服等成程ふ教く親類朋友より魚肉或も鞋鞆  
等は品成送て祝ひ

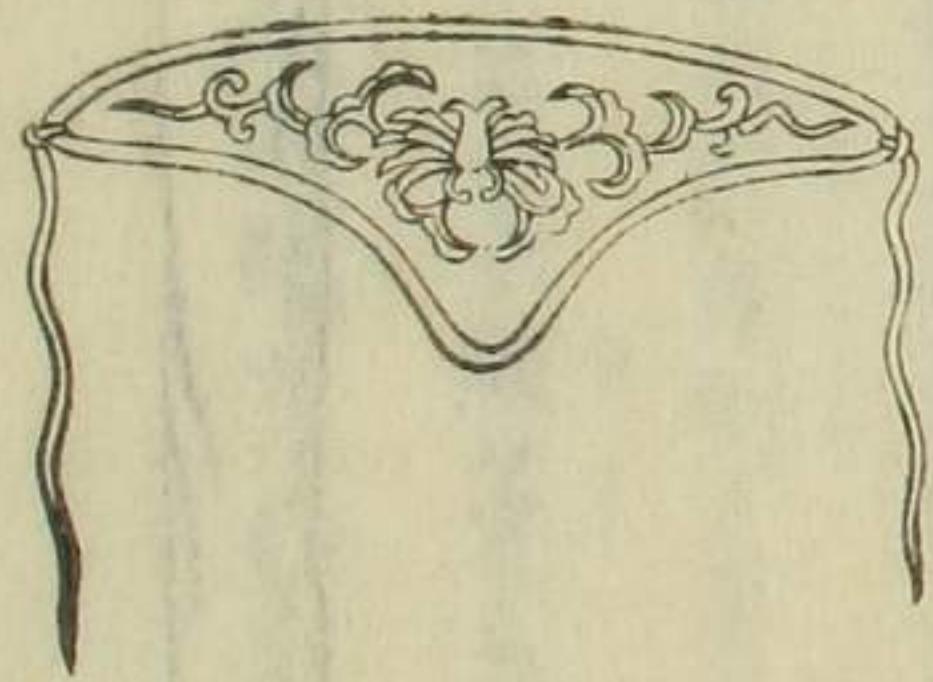
此名も同様

○周歲より一年同月嬰兒の長成を考ふて廳上み卓成盤け上み毛氈を  
敷筆墨書藉金銀笄盤等成程ふ至嬰兒み是を取ふるに至る事  
を取ふ文筆に達し書藉成程ふ教く親類朋友より魚肉或も鞋鞆  
儒學成程ゆか金银等を取ふて高臺成程ふ額のぶと此向  
親をな請く祝宴成程て親なるとれむとの満月の時ふを第一  
胎髪を残らば刑もあらず又ほんのくすり額の際頭に中経すとみ縁角  
のくすり額のくすり残し正とあらず或ひに入紫まで残らば刑とてに紫の  
吉麻とて髪を残し縫角成程すとあらずとも嬰兒と花帽子を戴  
く女子より額のくすり又ほんのくすりサード髪成程ふ十紫成程  
ひすて披髪とて額際の髪成程ふ成長成程ふ皆仕み切額ふさづにあらず  
切堯のくすみて包搭額頭中の如きを戴く十三紫ふからとて髪を残らば

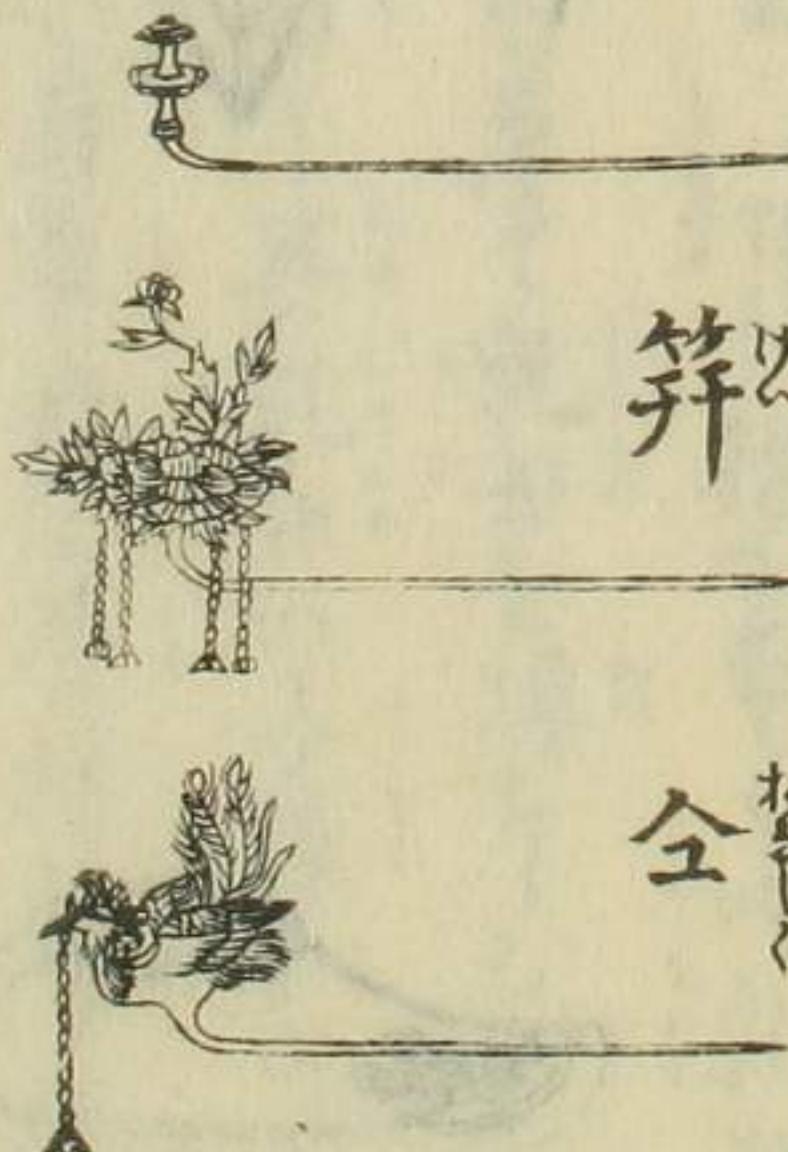
周歲拿周圖



○  
春の包頭を用ひ 包頭と御包搭から代に  
用ひ長髻奉にてゆきあひ等かくば 雲髻代りけ金銀珠玉やとの簪を  
ねびく冬寒れ時も浩然ゆるふ 帽子代用ゆるもあひ懸じて男女大  
小誕生して周歲まで程ひを経し其後ハ年々誕生日に程ひをたゞば十  
紫みかく誕生日は往ひ清寒甚れ夫婦は後後ハ十年間毎小誕生日に祝  
宴を行ひ ○ 女子ハ初く七八歳にされば纏脚布 足を包むを承く足せ  
先を固く卷一あらび至足の大きさくねやうみすふ車舟一ぢり故に  
七八歳已てハ高き外へ出で遠路へ行ひやうがく轎を用ひ出行せり  
此所當行の事と婢の願ひをそひ手代推引が下賤小戸の足を參  
奉も少く當行自由なる此女みは足を包む車何止の代り也  
嬰兒の枕を外を本綿ゆく送り内みよ葉葉あらひ八角形を清涼の



包頭



簪

全

戴包頭圖



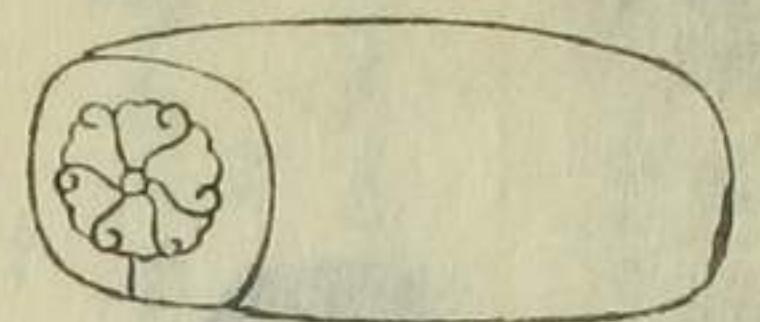
雲髻



包頭

物を入用や袋ふ赤小豆を成入小児の腰代押(カヒタヒ)至りに事外(シテイ)小児も都是周歲の頃(フラシスイ)すての横(ヨコ)を抱く腰(ハラ)をして抱く事を忌む又生れて六七日後これを多く下に縛(ミツ)ふを浦安腰せしむ ○ 穏渡(ムカヒ)の謝儀(セキギ)ハ銀三枚目入拾目或ひ百目身分(ヒヂル)ふ應(エダ)して等かづび大戸(オオドウ)と衣被假足(ヨウヒサツ)を成送(シヤウシヤウ)も多都て産の内醫師降成拓(ハタケ)股系(ハラシ)すふ事か一産前產後(サンゼンサンホウ)と之が化病を免れバ醫師を用ひ毛若血暈(アマモチ)あふう威(カハ)い難產等ゆく若死附(タマシ)醫師を拓くより血暈發(ハラシタマシ)して醫師問ふあとすか附石(タマシ)石あらひハ致の物を火ふ燒て磁器(カキ)ふ醋を入れ產婦の鼻ふよひて燒たる石後物の類を醋ふ入嗅せしく醒覺せしむ又產後而附ふ童便一盞(トシベニシヤン)天目(アマメ)と用ひ欣しむがも血暈消治(アマモチノシヨウ) ○ 產繩の類あらびふ天兒に難守(アラヒ)あらひ墓目等に車(カマ)ねー ○ 背附(サクタヒ)ハ腰絆を男子ハ父の舊衣女子ハ母の舊

布枕

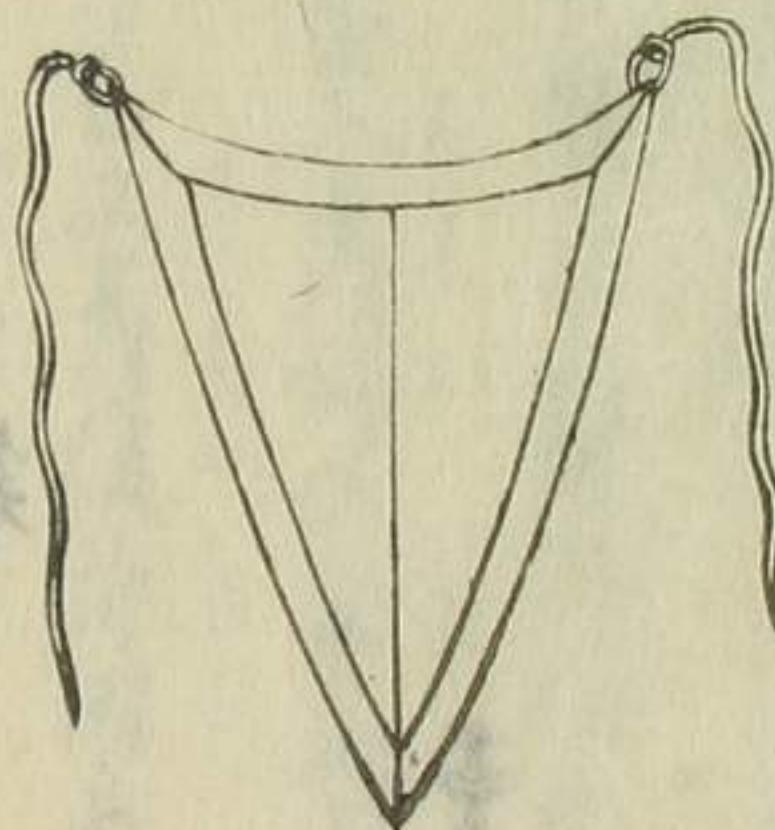


纏脚布

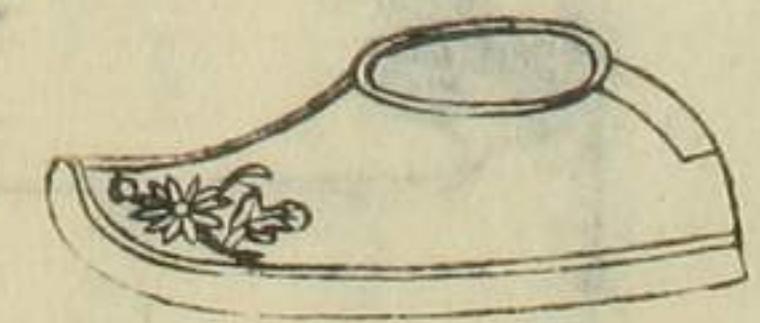


同上

浩然巾



女鞋



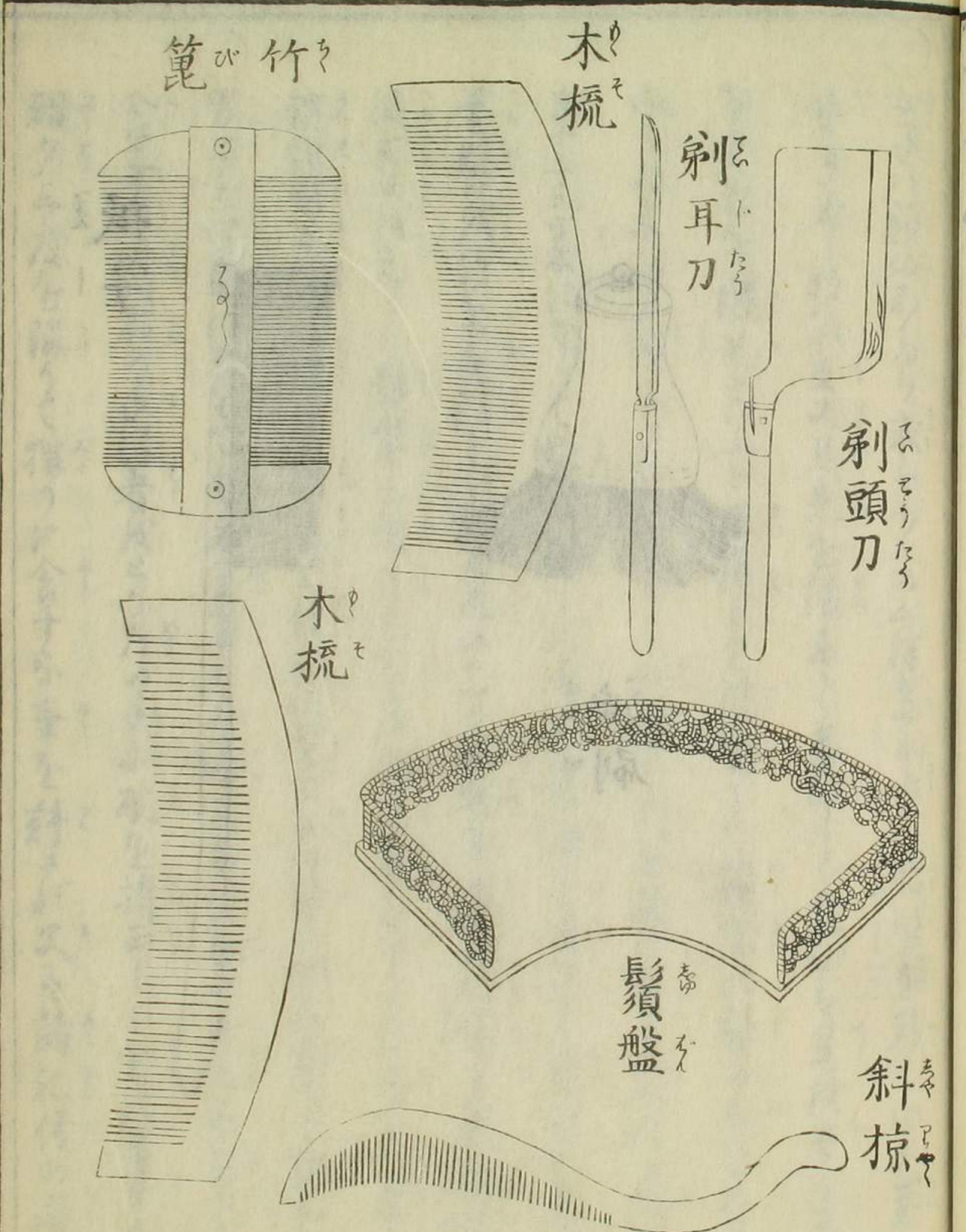
衣被用ひか就あひて高財がく行ふ事例  
○子誕生の後外母は乳を以て乳母を一母養娘抱へて吃乳努む  
子五六歳みぬと乳残吃甚しがひみどりて乳母を帰らむ若母の子  
長成の後宮にはく歎或ち家無昌一其乳母の子孫を多く倚靠  
まづきとのあざれを呼れく一生専らひ屋事あひ其作ハ多く人土著  
陽にあひて帰らむ卒工を九ヶ月銀三拾月或ひに拾月不ぞひ高  
奉ふ者と衣被行李等を自身備辦は差錦村より即ち貿易等も主家うち給些は  
抱へてみゆ一ヶ月七八日捨て寝たりあひて衣被等も主家うち給些は  
故あくして一生抱へ切わざひ主家あひと人ふ嫁せじふ頬のまわ

清俗紀聞卷之六

清俗紀聞卷之七

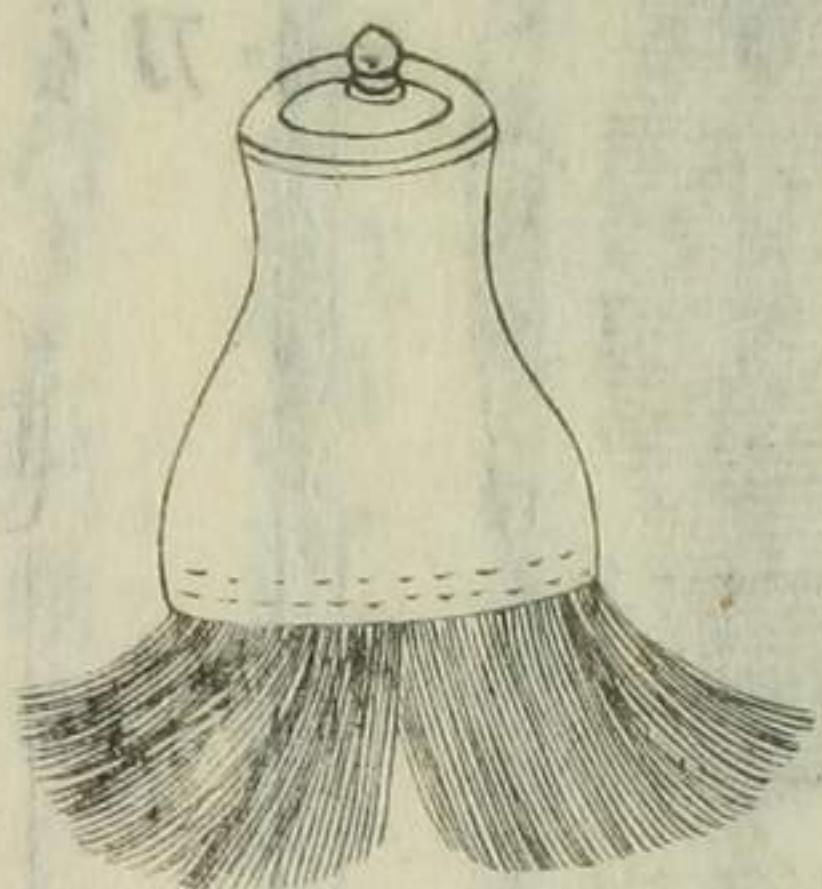
冠禮

○今清の代冠禮は古式流傳の如事形一男子歲少て加冠す  
定免も約十ニ歳の内恰好見あり易え服を承り承賀する事もあ  
女子も歲少ほど笄すを式形一十歳以上て許嫁すと曰直子  
上笄は母日祝賀あから上笄を祝すて之に詣嫁成祝すが爲て  
酒宴を設く○男子ハ三ニ歳より頬の中絆み髪生ト総角み髪  
あひ至る方々ナシト総角を二ツみ髪のあかもあると號すて隠耳  
刹ト花帽を戴き十三ニ歳承なれば天德月徳等は吉見成多々元  
服也○元服れ而して廳堂あひの房中ゆく利髮人を以て髪儀承  
命して面盆承湯成ゆるせ其の刃も椅子に坐毛利髮人湯ゆく頭

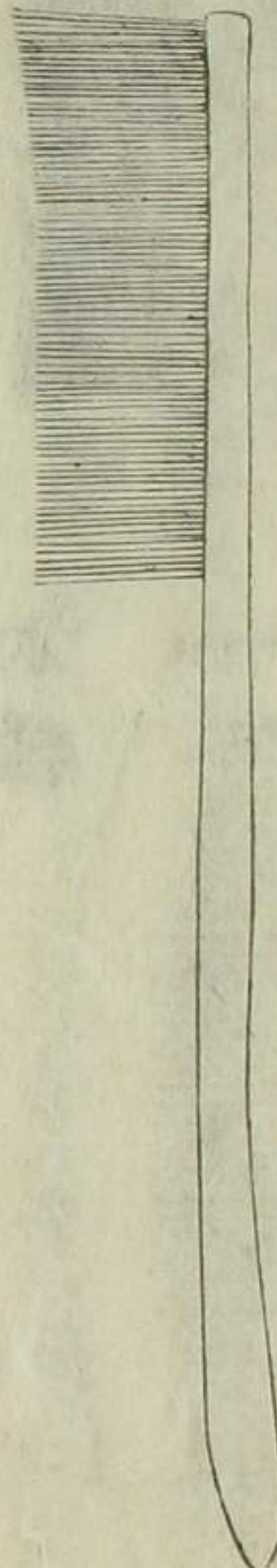


を志免へ改め生中に始成を除其餘を残らば刑たゞて生市せ髮を木  
梳を以て梳り竹箆みぞ垢代を能梳入ニツト辯かけ打立是を辯子と  
云周羅髮あづべ 髮先を江筋黃の糸かく留帽子を着て二十束余に  
も引ひ花色黒等は未成用の帽子を左眉の時ハ職帽を着て外出れ  
節も大帽子岱着は元彼の日しても親敷代折清して祝賀宣せ奉れし  
都く剃髮人とふ事下賤の者かく剃髮梳既至未成濟世とす一人ま  
の侵殘六十文甚附くにあふえ彼は節初く嘔ふとれハ百丈もきほ小兒の肉ら  
剃髮人を嘔み在はまひ奴の奴婢比類本命じて剃らしむ九一ヶ月又三月經  
毛利梳すり角とも剃頭店ありて家内承帮手をあ三人程も抱へ並下宿の者  
行く利梳せむとが十文十五文も遣は一定したる事なし

抵子



油刷



○女子の額のあおり或ちびんのくぼきかゆ一胎髪を残して又耳を  
髪を剃り取らるゝ足先を緒ゆく表ひて包むと是れをうさぬ爲  
ひと先を纏足を五十步須と披髪とて額際は髪の毛を六十步  
くわ小切で額小きにわが一包捨とて額脇に髪の毛を六十步  
き十三步にたりて髪代彌くば青い菜油を用ひて髪色を潤し  
雲盤代はも包頭と云盤を包のすて化物を用ひ許嫁すと聘納を  
後吉日成えても額髪生潔眉毛等代利付笄をさへむ先を上笄と云  
親類朋友等代請して酒宴を設け祝賀するの髪ハ婢命して梳らむ  
○男子三に罪にたりて自身食事もふ頃ふあれの母の手元ふ至らま  
食事の付の右の手に箸成らうため小碗を持てて食事の事を教  
朔夕ニ度を限りて櫻の内食事の事を許さば父も諸礼儀の通親

類等は來るる第作揖

揖の如きを細々と先手 指手と口首

等は作法長者以下足音と争ひて聲を打つて身を屈め手を口首

士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承すれば身成れま

士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承れば身成れま

士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承れば身成れま

士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承れば身成れま

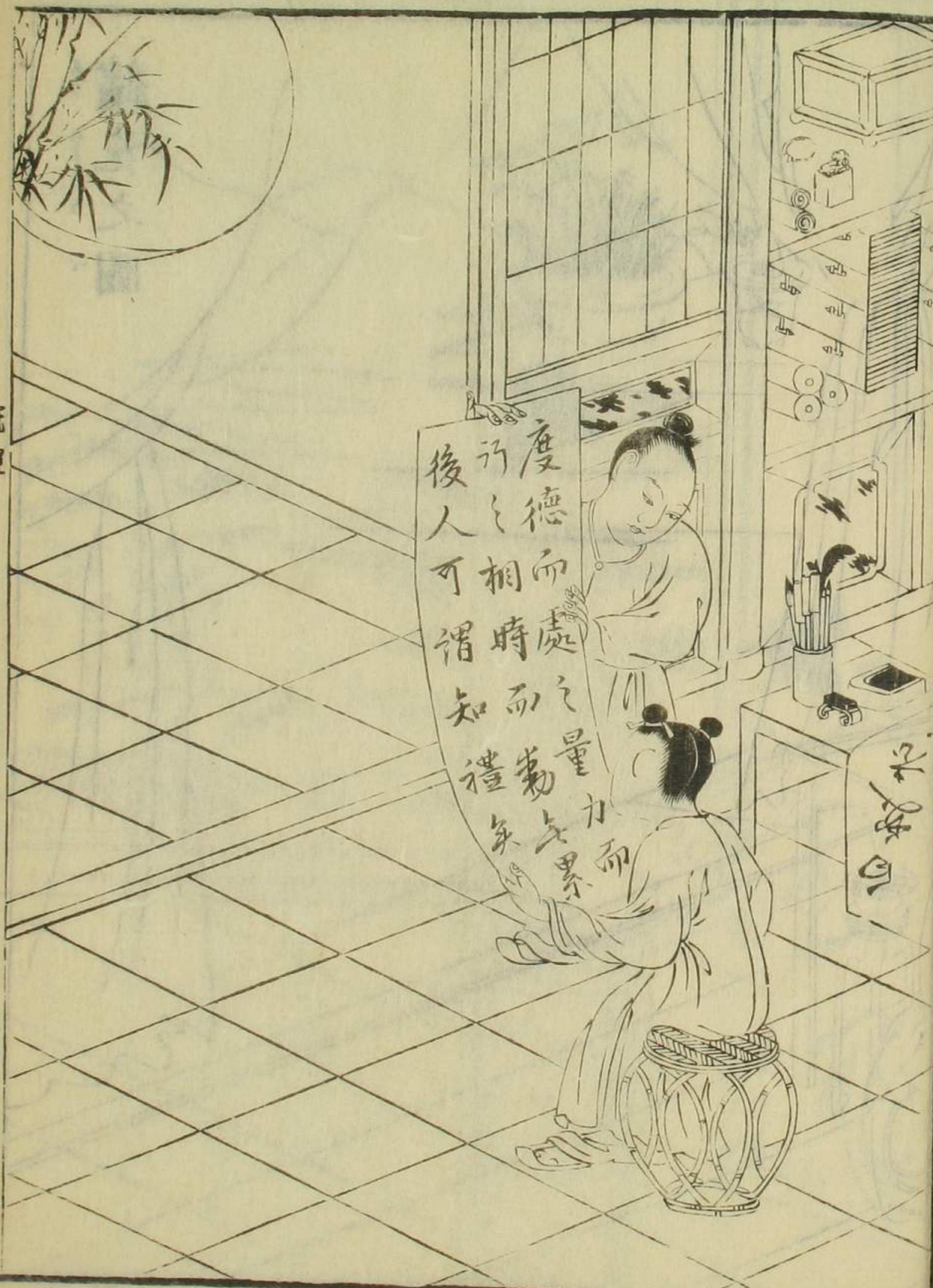
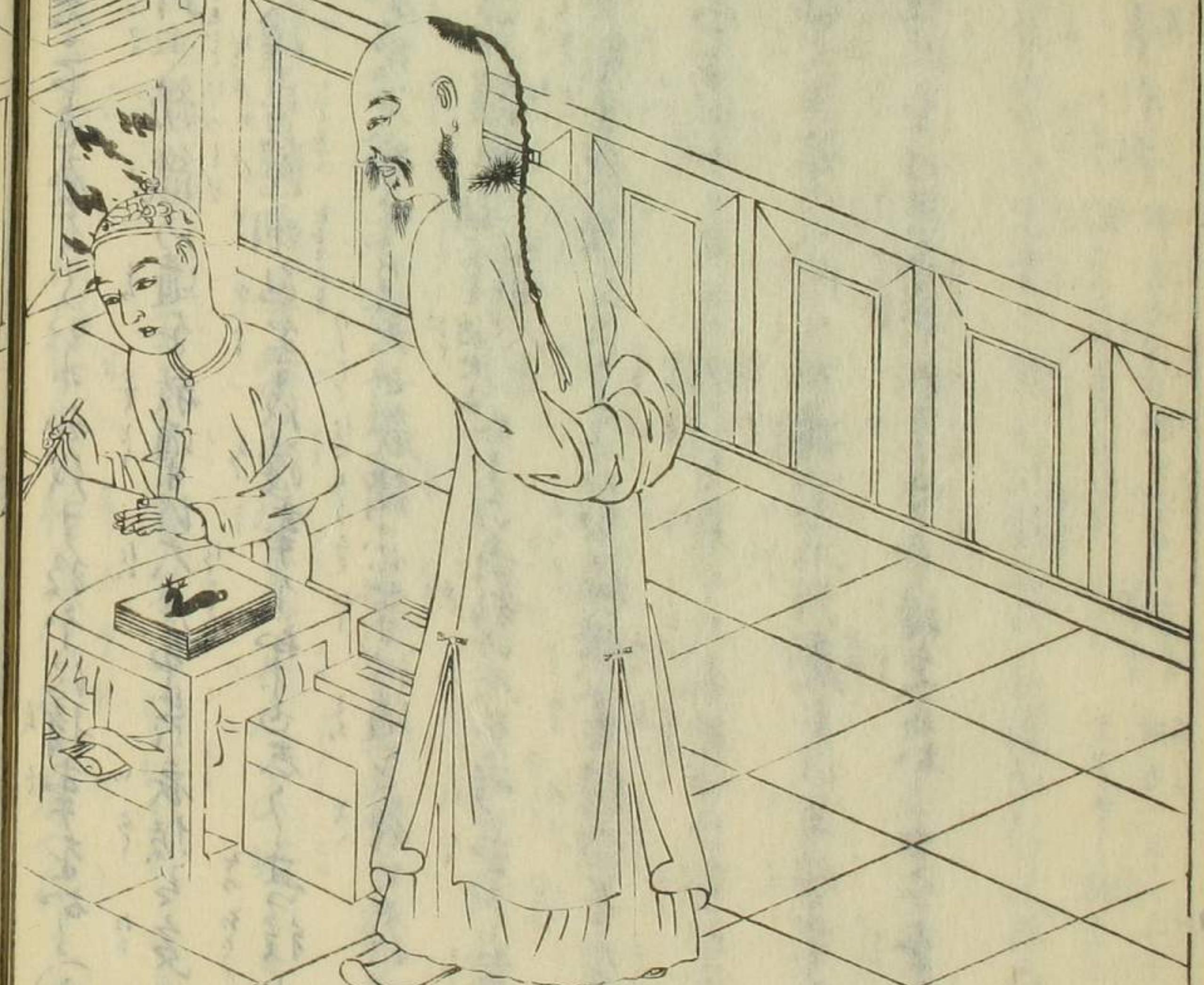
士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承れば身成れま

士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承れば身成れま

士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承れば身成れま

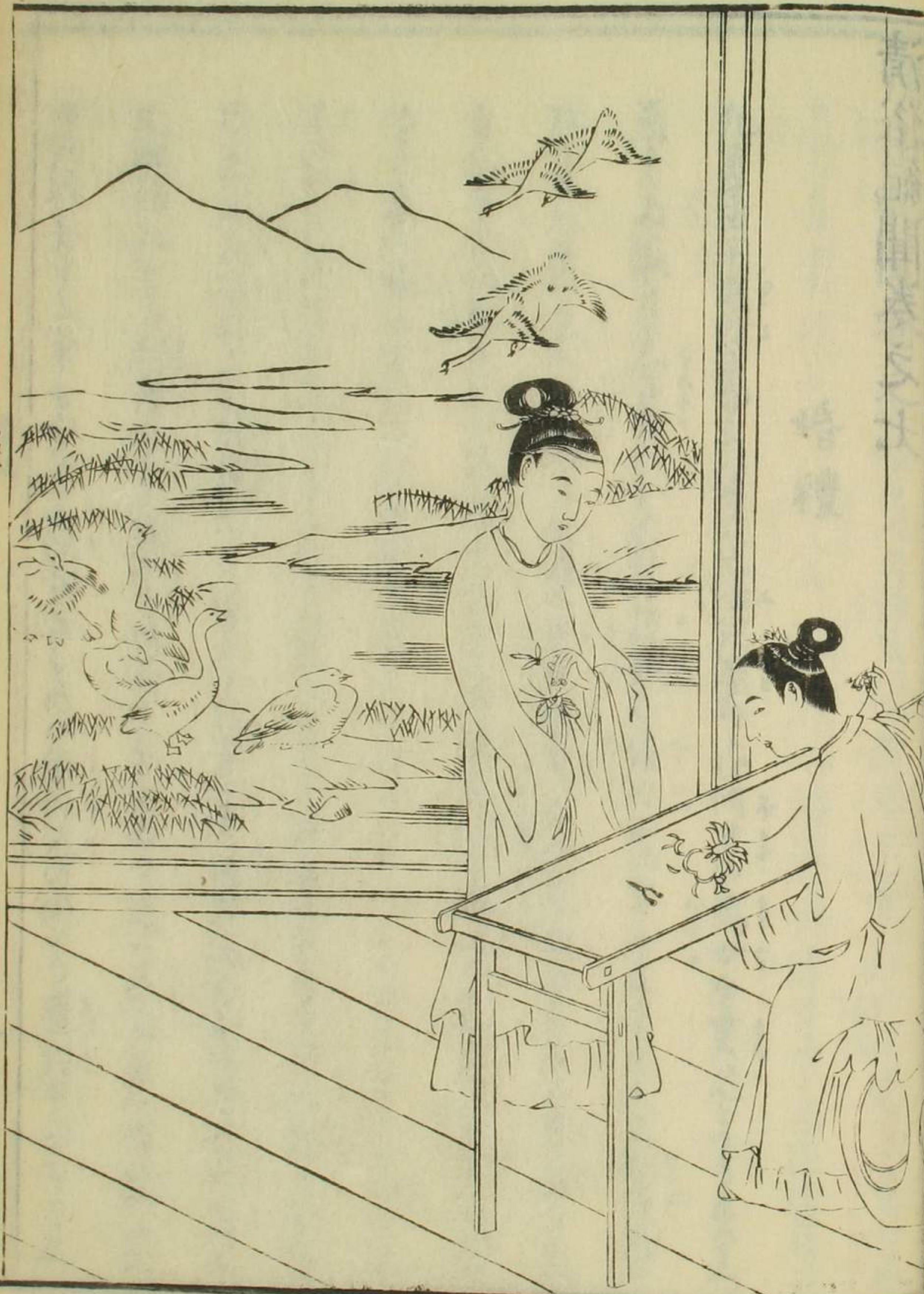
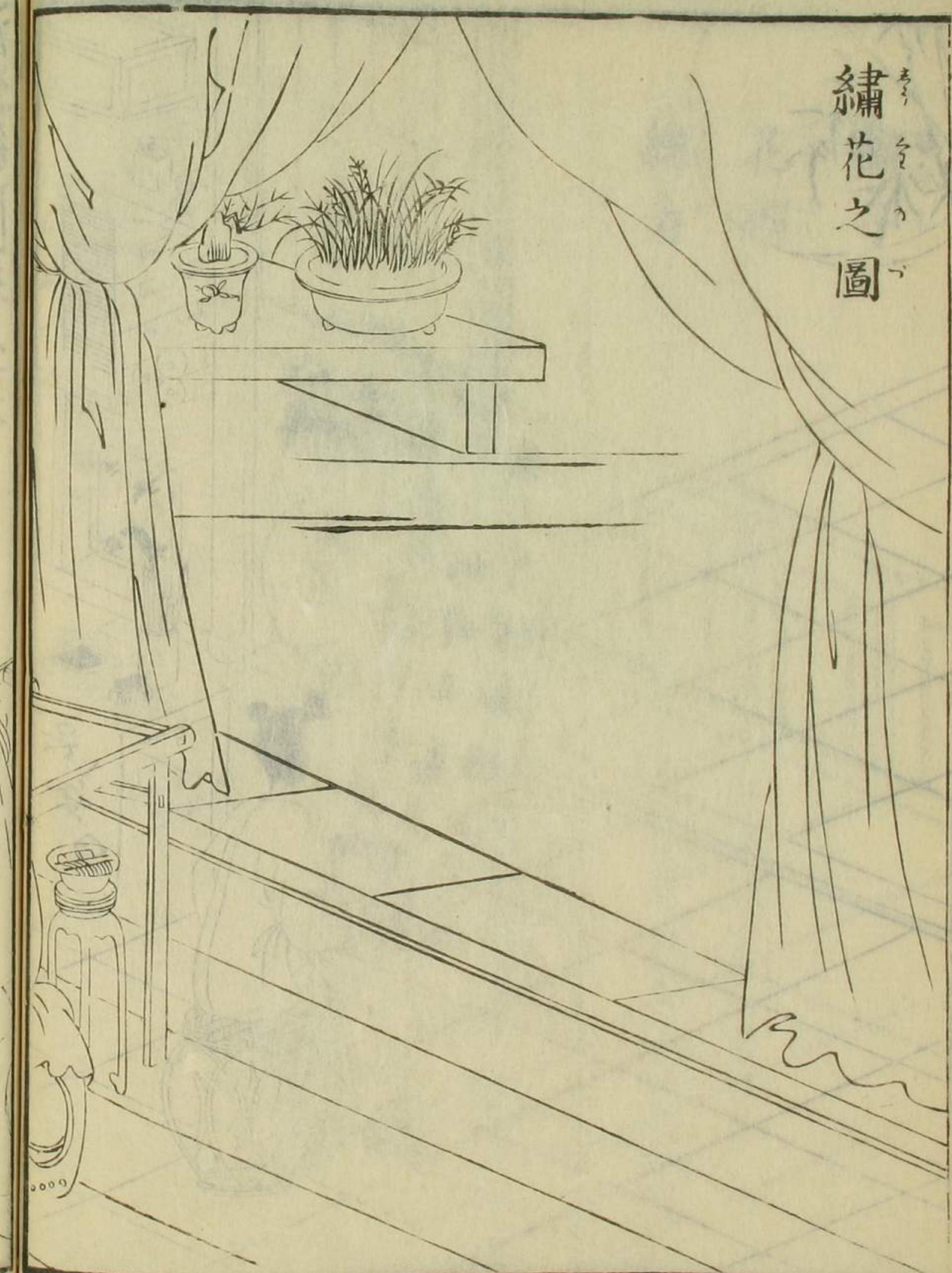
士と勿論農工商とも承讀書寫字を習むせ七八歳承れば身成れま

瓣子花帽



度德而處之量力而  
行之相時而為之累  
後人可謂知禮矣

繡花之圖



## 清俗紀聞卷之八

## 婚禮

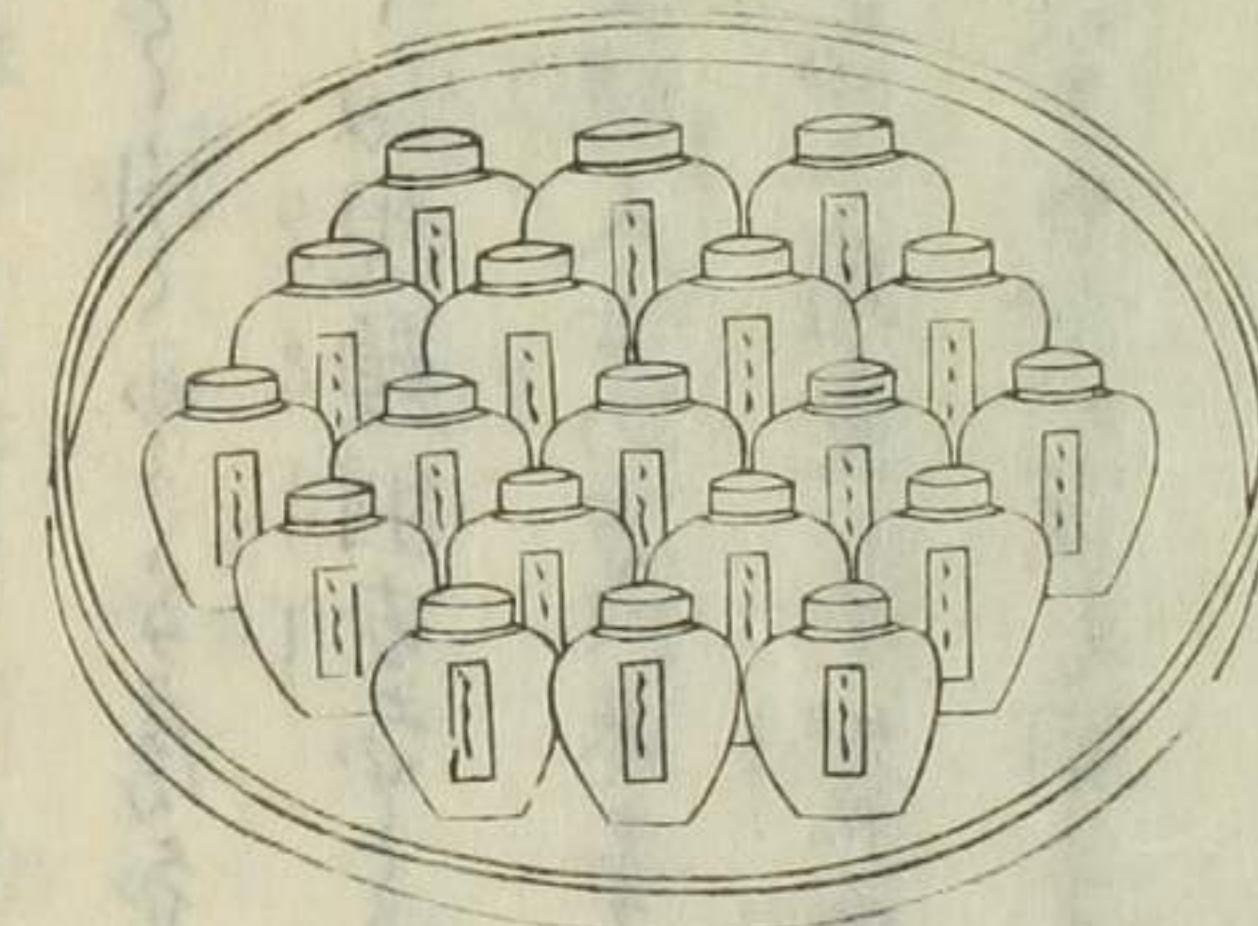
凡男子二十歲餘年而立其父兄婦成娶うむ何方の處女を費々とすらもまつ  
 無くも家承ちよひ易ひ人を輕々説親モ媒人の方より主ノふ面接は一  
 例入坐不主人外廳み坐途へ先生勞駕有何見教と云互々寒て温を  
 互々請坐とば客有坐と答へ辞儀をして椅子より今愛せ何言  
 の子息は嫁小姓ひひ見類甚成以く作伐せむとば女家の主人至り不  
 すの小女箕筆具備トヨリたゞひそひそ辞退の色あり媒人押す入れば  
 ひそひそ又祖伯叔みも相候候一返否ア返きて嫁が返事をひそひそ歸度  
 又祖伯叔すと列座みて領事返答するもあり或は其底主ノ媒のかば  
 やれ返答する事もあり又祖あきらの伯叔兄の内より應對をひそひそ又

多々つまて入龜の者ありて外廳み坐ひふ乃守直み内廳後軒より  
應對に男女幼緝の時より聘定（ピニテニ）又言姻もかを五十四五歳（ナシナカ）よりて説親を  
あらわす幼緝より聘定（ピニテニ）とも未曽做親已（マシナリ）而みづかせり事五は  
相互み定式の喪服を着て喪城はとむ室式の喪朝をして女を再嫁せしを  
男ハ男家（タケル）肉詠（タケル）して男家異儀（タケル）されば再嫁せしむ先を再醮（タクイツマツウ）と云若  
男家より一旦貰ひたる事あまび是非贊婿（タクイツササキ）を入て妻（タカヒコ）べとつは  
女家莫儀（タケル）あらゆる所成長の上あく幼末の通す男家（タケル）遣は女  
元より侍へ娶朝畢（タケル）其女の妹（タケル）ば妹死せひ君相應の妹あられば  
外み縁詔す惣（タケル）婚を結ぶが庶人（タケル）の街長（タケル）小袖（タケル）も官吏（タケル）の長官（タケル）  
届立が奉行（タケル）○媒人（タケル）一昧水人（タケル）又中人（タケル）親類又ハ朋友（タケル）ある内あ家庄  
熟練の者或いあ家生入の輕瓦阿媽收生婆（タケル）一名穏婆（タケル）あらわす能

者成頼も内分入るゝ歟或は何方みに歲歳伝の娘あつせ方の嫁み内  
其ひをゆくやあく内み女房あくみ阿媽などと云入らすも此  
下妹へゆくに入<sub>レ</sub>叔親顎明すあくの内表向の妹成頼も改く女比  
方母妻ひみれも<sub>レ</sub>媒人女の方比返事を差す男の方み返答も時  
男の方みく酒肴ある用意して食應<sub>レ</sub>事もあらず又別院<sub>レ</sub>吉日  
を撰<sub>レ</sub>招請もかまふも女の方も同<sub>レ</sub>  
録<sub>レ</sub>詣<sub>レ</sub>調<sub>レ</sub>あふうふく阿媽あく  
謝儀<sub>レ</sub>貢富<sub>レ</sub>みよりく等かく  
雙方允諾の上二三日も縫<sub>レ</sub>吉日を撰<sub>レ</sub><sub>レ</sub>天德月祐<sub>レ</sub>嫁<sub>レ</sub>書簡  
を遣<sub>レ</sub>此時み茶<sub>レ</sub>茶<sub>レ</sub>女の方み送<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>福<sub>レ</sub>確<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>て收拾<sub>レ</sub>確<sub>レ</sub>  
確<sub>レ</sub>の不同あり送<sub>レ</sub>茶<sub>レ</sub>とぞて先を授<sub>レ</sub>茶<sub>レ</sub>とぞ<sub>レ</sub>茶<sub>レ</sub>本根を移<sub>レ</sub>植<sub>レ</sub>  
而<sub>レ</sub>故ふ古の人婿成<sub>レ</sub>聘<sub>レ</sub>に手を用ひて  
禮<sub>レ</sub>する事多<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>此遺<sub>レ</sub>あく  
書翰<sub>レ</sub>并茶成<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>み奴婢を<sub>レ</sub>奴<sub>レ</sub>下男<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>て遣<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>媒<sub>レ</sub>を頼<sub>レ</sub>きし媒

無駕筆未至行車もあらずの方に至り有人在磨請教とや入べ  
取次の奴僕先く右の書籍並成請取受取つてにまづ ほの類を主  
人承達主へ書籍成受取亦承取を認め取次の者より右の  
使の者承達す媒人來りて主人對面せ

茶 サ・ル 授 ジウ



初訂烟禮帖式用梅紅全帖恭求ム口允四字用金簽寫  
父或族長出名

恭求

某某郡年家恭烟弟某姓名端肅頤首拜

台允

全

謹遵

某某郡年家恭烟弟某姓名端肅頤首拜

台命

式家女翰書

式家男翰書

禮帖封筒用大紅紙正面金簽寫全啓二字

式面正筒封

全啓

接縫用糊牢貼口不封

式面背筒封

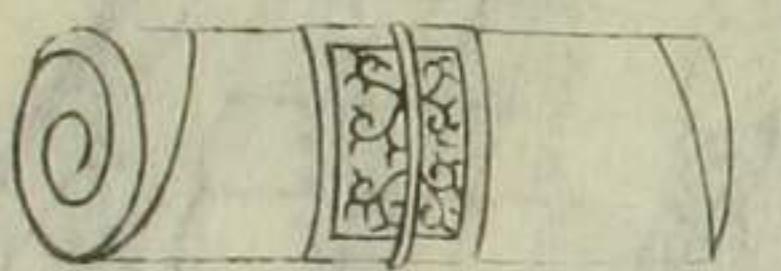
露申

奉茶

奉茶奉茶奉茶奉茶奉茶奉茶

○又數日過く吉日を擇き送盤中を送船中を送船とハ結納の送り物  
工物并戒指水筒并戒指等送る事を上笄とす ちふねとす まことに此時取締の  
吉期を擇き女家互通を是を道日とす 道日とす 俗語みく日をとすと古文  
因取を男の方より通へたる時女の方外に一つスもされば並に用意す  
若故障等あひ外ふ吉日找擇之を由媒の方より相候をか 此吉日陰陽先生道士おれど  
矣む此時女額際の髪を切く額みへ包頭をはけ又笄を下す も是ハ此方の教

紗 繡



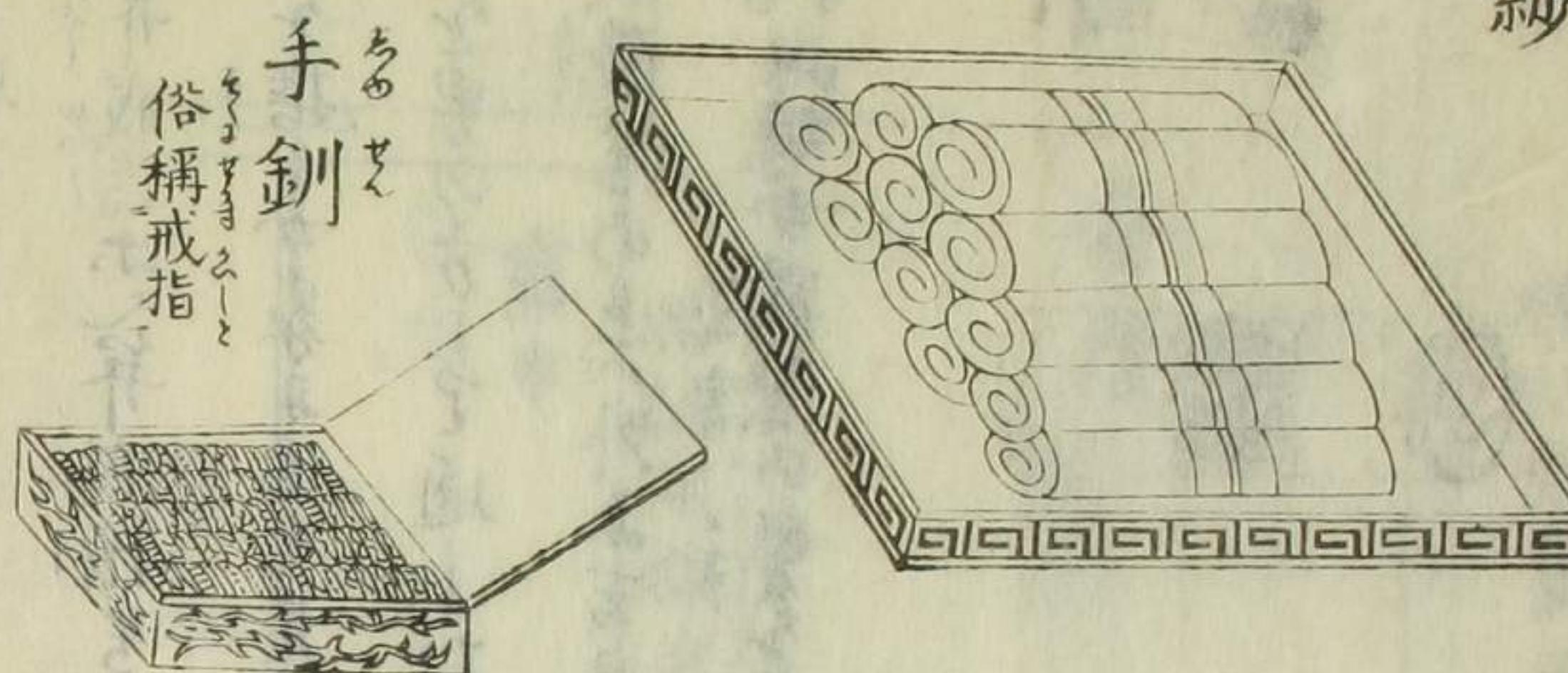
增礼

子 緞

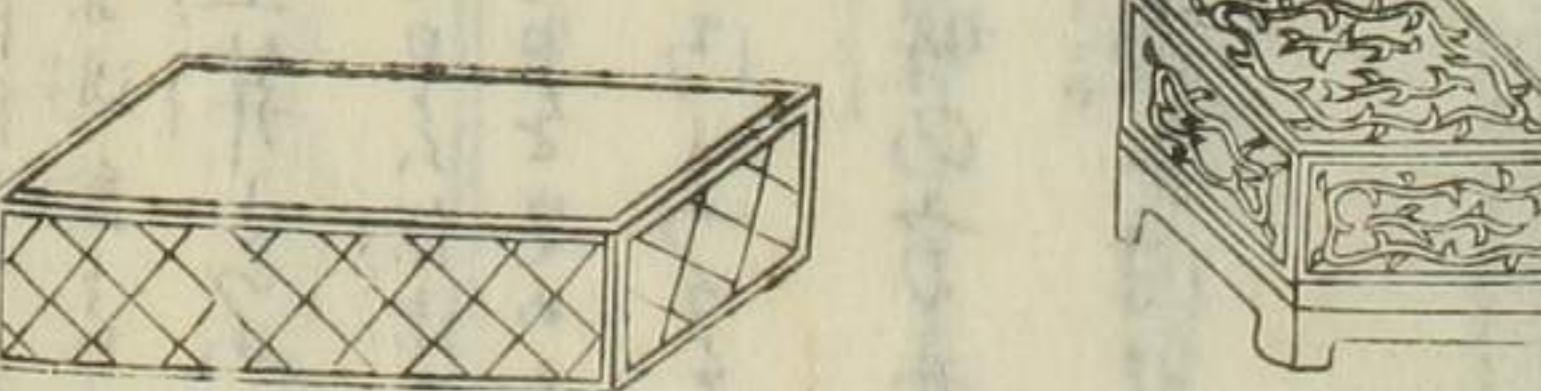


四

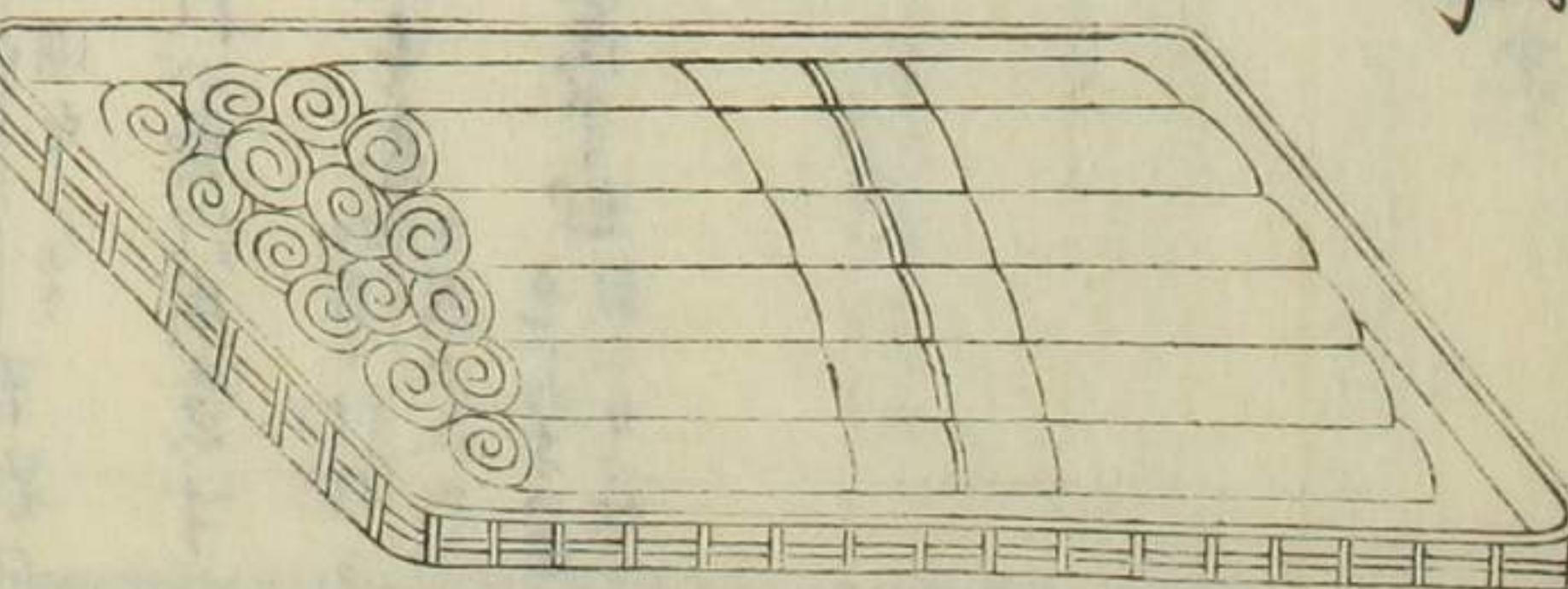
綿紗



珠玉匣



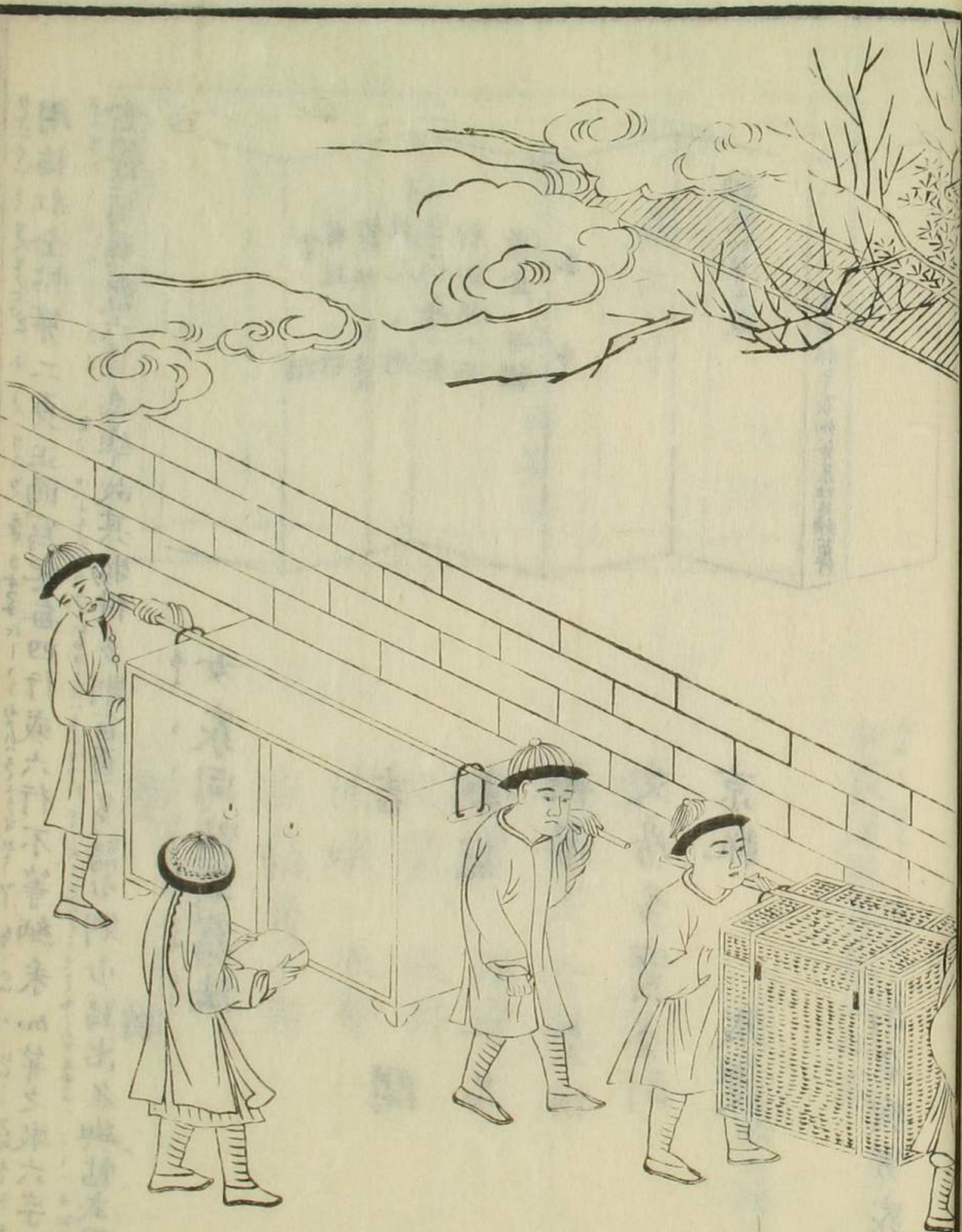
緞子



手鉢

俗稱戒指

○此時書簡及同錄を添へ使を以て女の方ふせん又嫁入類を遣す事有  
双方よりと祝儀として使の者ふ銀子袋遣す也書簡は父の名ふくせん定  
あ死者の伯叔兄の名ふくせん遣す結納受取處（まつりておほし） ○右結納の品受取の後因  
五日も経てかの方よりも又嫁入物を珠玉緞匹の類不同あり又物珠玉  
の類男家より嫁入口と摸様あるも同物あれどみ見てくらぬ先を画  
帖（けい） 画帖（けい） 通考也此時女の八字代送（はづけ） ○双方の賄合せふく婚礼道具の  
用意を女の方ふ諸道具の用意出来て男の方より通じたる婚礼吉期の  
二月正月ふ粧奩（せうだん）を贈る ○粧奩の因縁男の方ふ使の者持ゆる男のこ  
みくも次の者受取れく取て付至使の者ふ祝儀袋を以て嫁入道具へ  
約基（よき） すがふかをのめへのせば道具をうち代兩人多く中擔のみにて人殺  
多く持運を面圓せん



用梅紅全帖（ウラハシロクシキツ）第二頁正面寫起每四行或六行不等納采加笄之敬六字用金簽寫頁數六頁為率故其物件多則每頁多寫少則少寫出名與帖式同

女家同帖式寫法

吉  
鳳冠一對  
霞帔全龍裝  
珠花十對  
金花幾十匹  
綵緞幾十匹  
黃金百鎰

奉申

吉  
朝冠一品  
袍套全福  
文房多寶全副  
京靴成雙

納采加笄之敬

某某郡某家姻弟某姓名頤

出名與男家同

女家送粧奩帖式同前

岳父出名

眷生某姓名頭首拜

吉開

梳粧臺全副

圈椅滿堂

立臺成對

圓爐成雙

衣箱幾十對

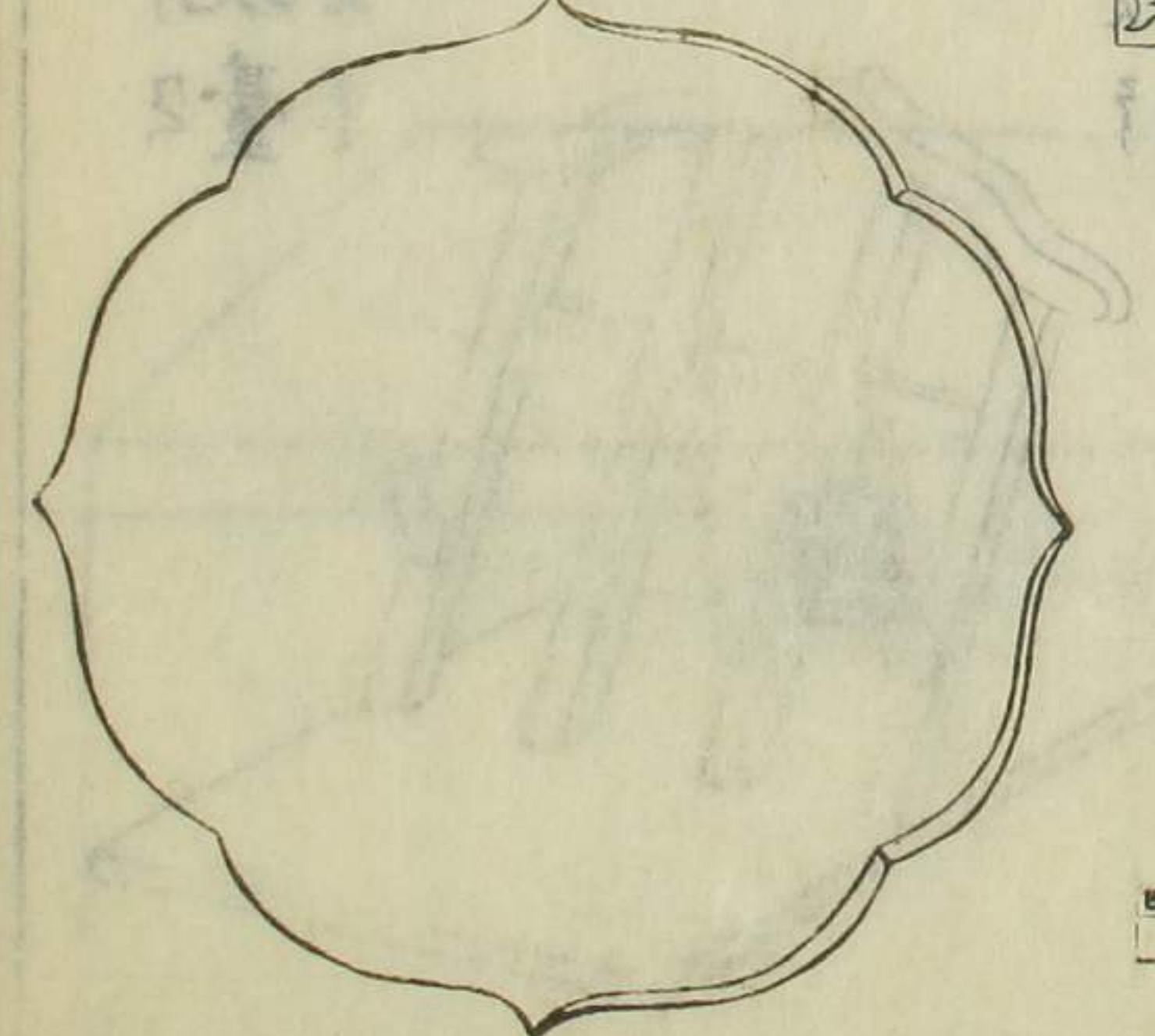
子孫桶千代

慶餘

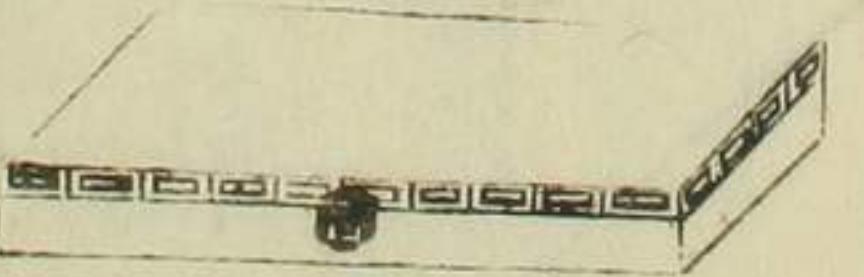
背子鏡



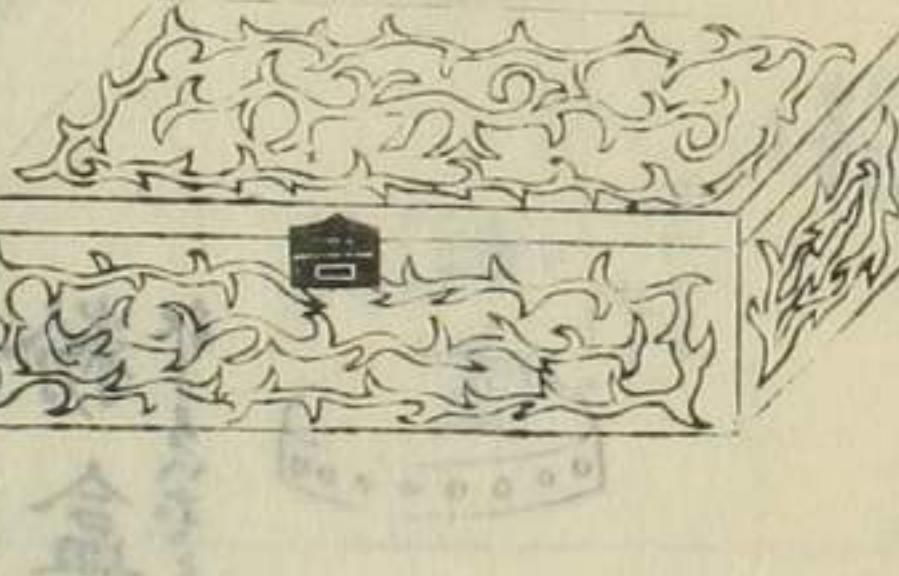
正面子鏡



針線匣

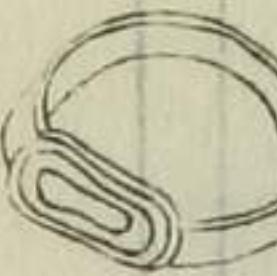


鎖手

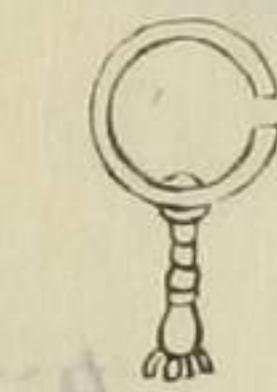


盒

戒指



耳環



同心金釧



釧

金釧

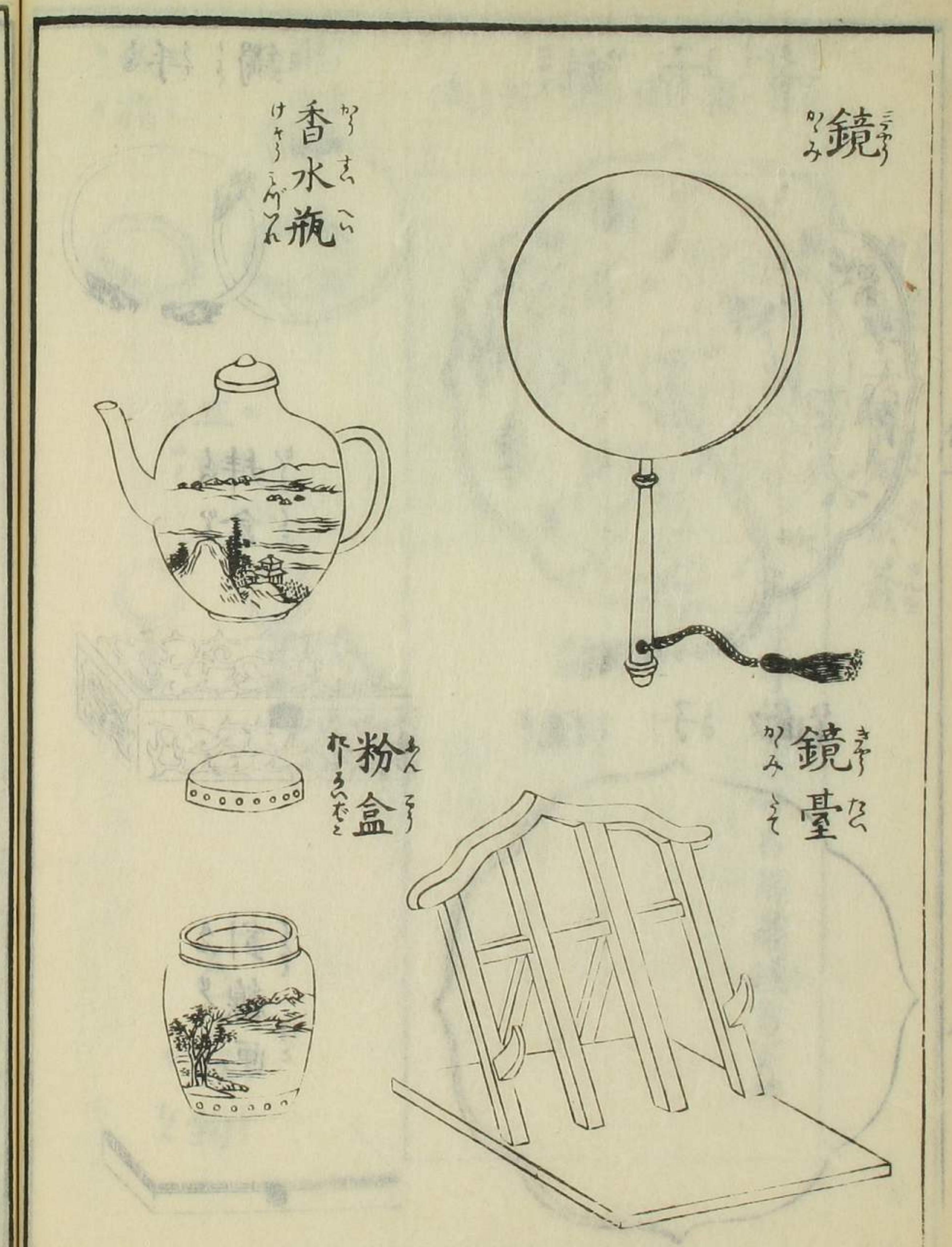
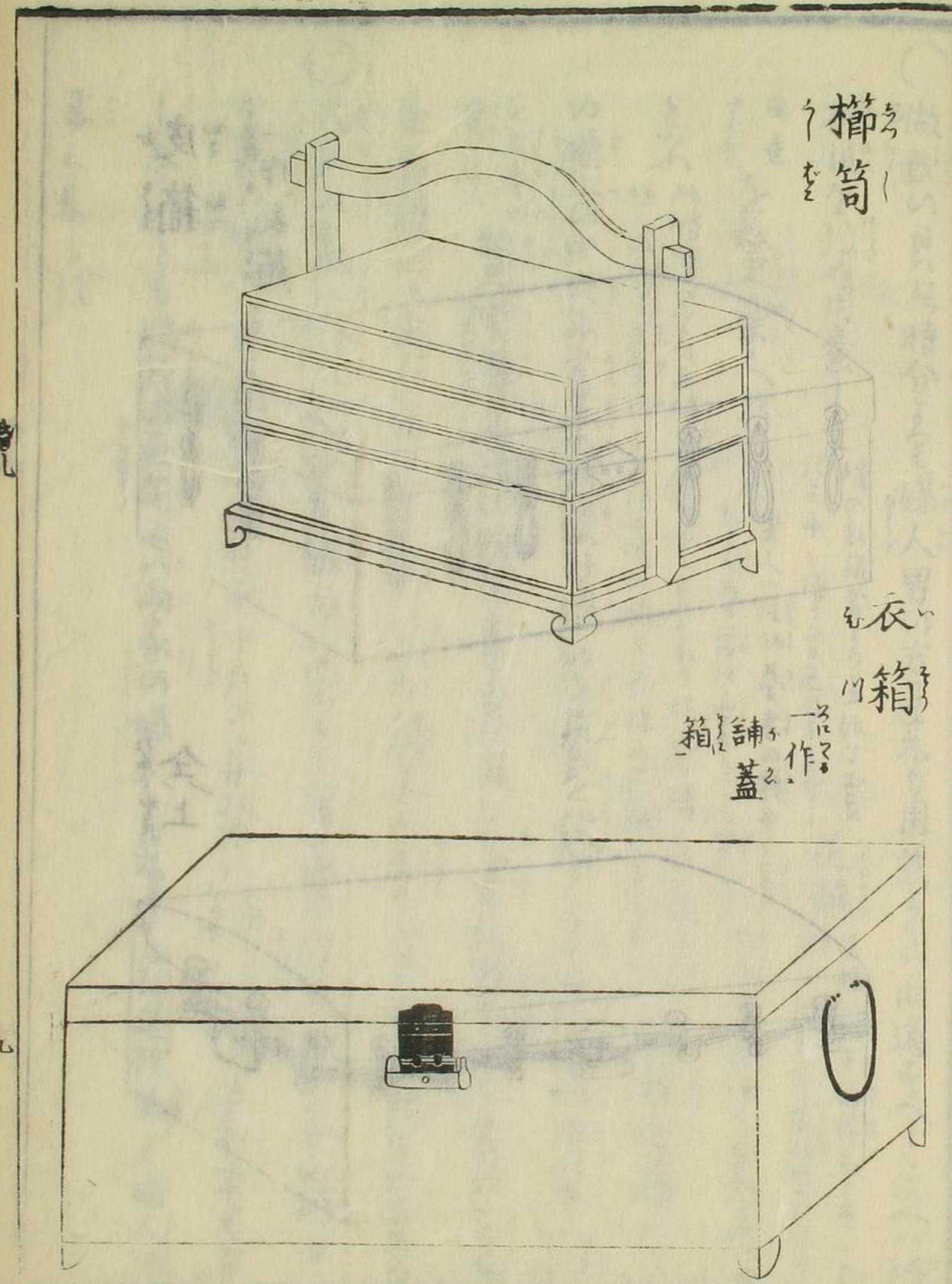
式帖謝家男

謝

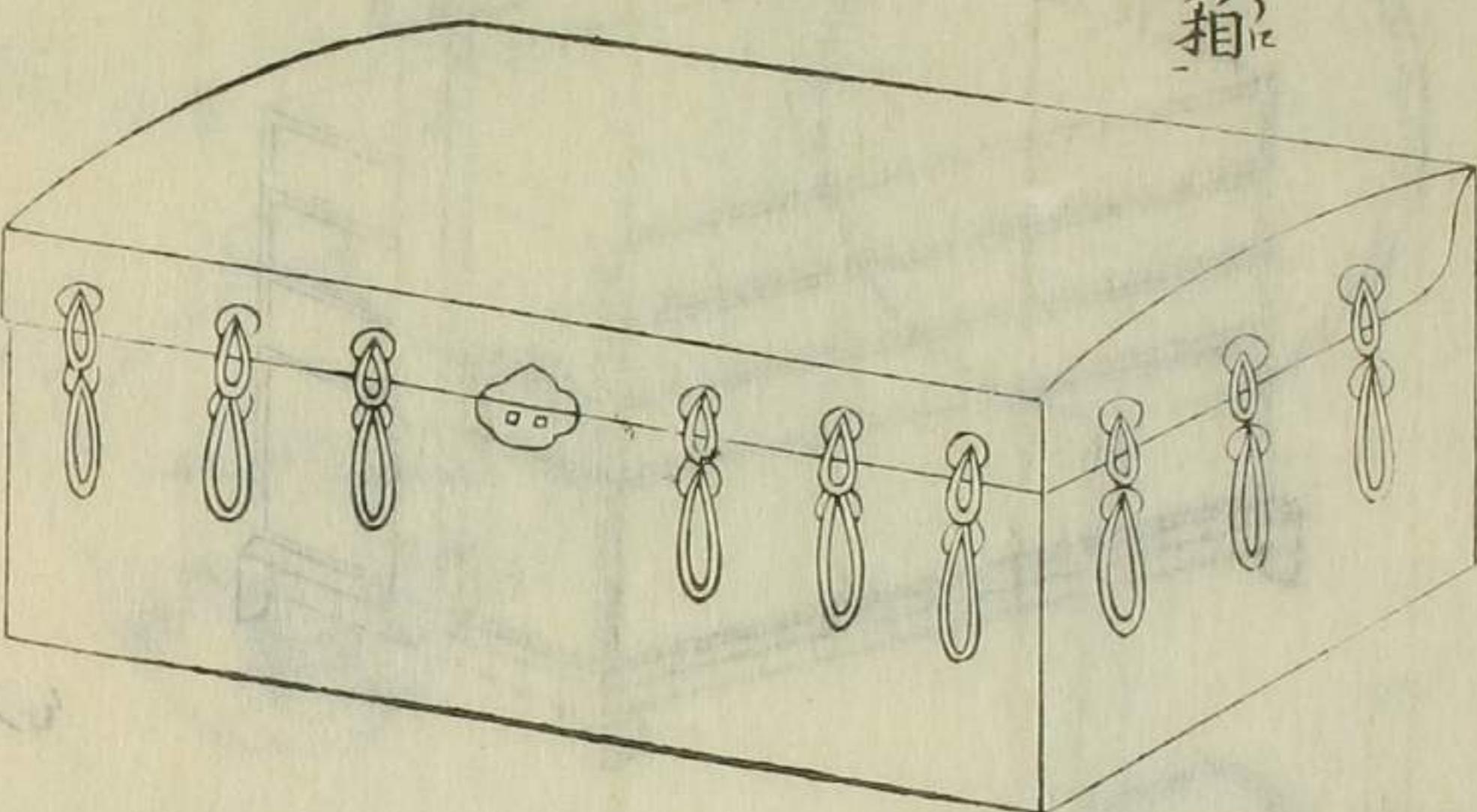
領

領謝二字用金簽

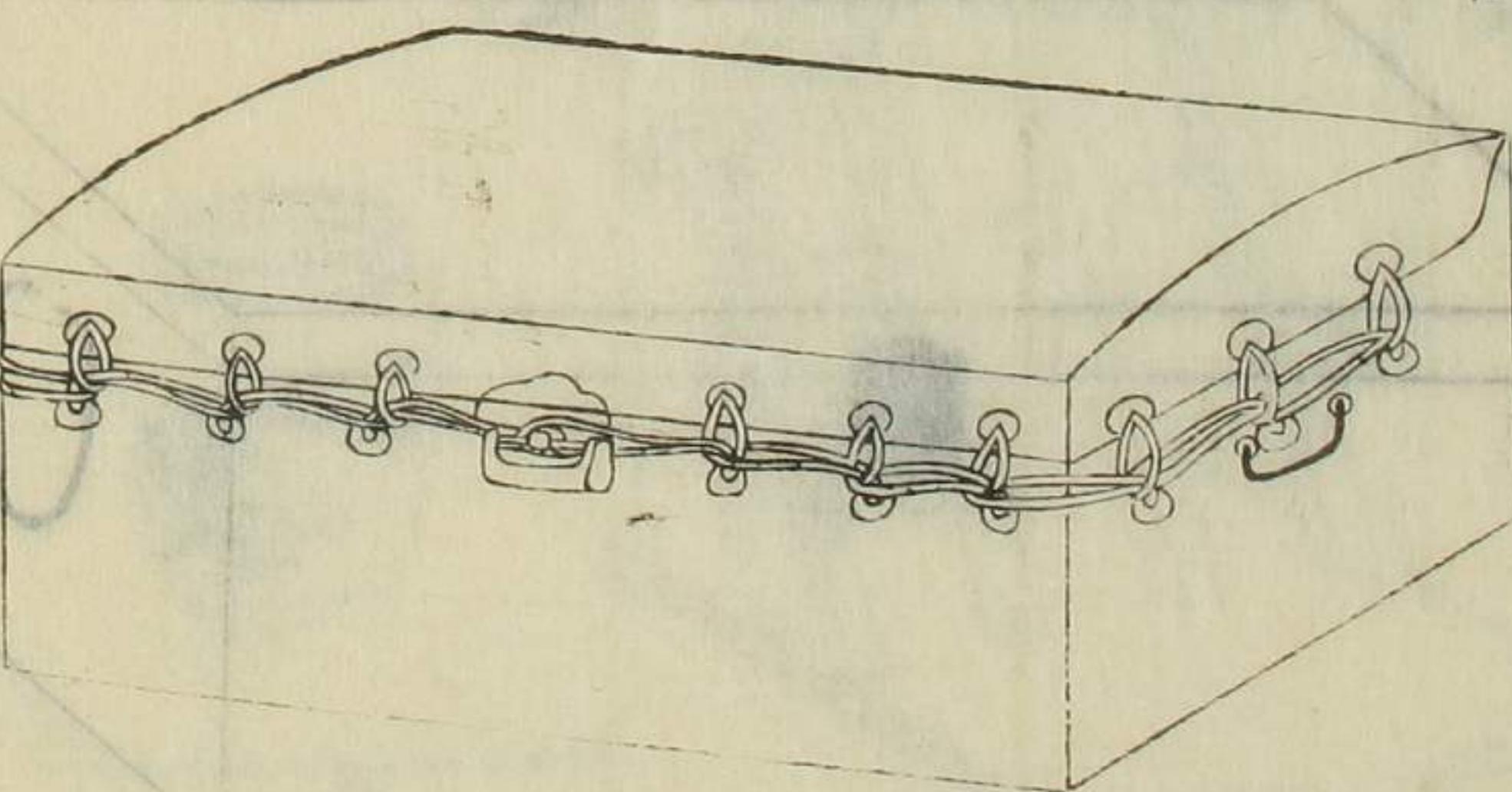
門下子婿某姓名端肅頓首百拜



皮箱  
一作衣箱



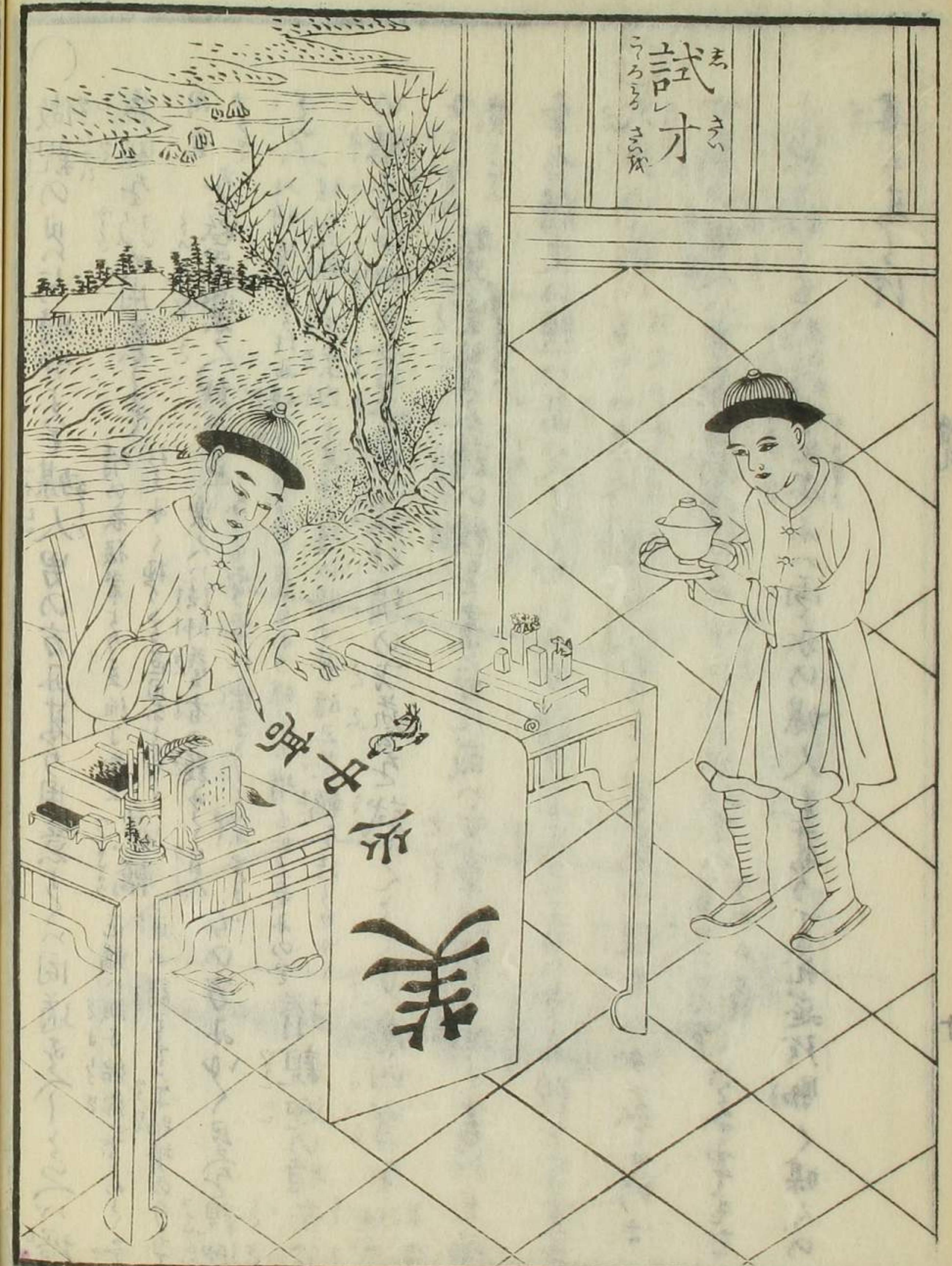
全上



○ 做親の日は時分より媒人男の方より用意づくと之へ婿衣服を改め用意して婿の衣装常より立派に生三花轎花轎へ娘子徳錦をもぐまき用意もくじを敷之樂人ゆき樂人はが御用者ごようしゃの顔おほく盲人めいじんするをあり常に樂ふくし業わざを女の方より旦あさを親迎おとこむすびとす此時婿よしはみ媒人めいじんもうちまでもう媒人も婿よしもかう蓋ふたの上うえの頭かぶ媒人の嫁よめ子こ先室せんしつ内うち其次小疋こくひの嫁よめ子こ其餘ほか花轎はなこしをほしせつせつ婿よし親迎おとこむすびの時岳父おとこの廳ひや上うえの中央ちやうみ書かく田た安やす成な放はなけ婿よしの才藝さいぎを試こころして支房しろう四寶よんぱうを寶たからとす教くわ之の雲くも筆ふで小詩こしの題だいを書かて或もり文章ぶんの題だいを出だし書かて乞こぬ車くる詩文しぶんの題だい岳父おとこと出だし又また女詩文しぶん出だし者ものかより題だいを出だすまゝ大戶おおとの家いえは家いえに十四五人以上よそ媒人めいじんあつて男家の媒人めいじんの女めの家いえふ行ゆきす女家の媒人めいじんハ男家おとこいえ外面めんめい候ませぞ中戸なかとの家いえ以下いげ家いえに六七人よそさまふをもなま一あれとも始はじの死死遂とみハ兩家りょういえの媒人めいじんをあつて死死遂と成な即そくく媒人めいじんの妻めぐらも死死遂とば

試才

うろもくまわ



○婿の轎子女家の大门前小至かを以て女家の奴僕婿より祝儀渡  
求多へ為門を喰くひて宐うび此侍婿の下部よと女家の下部  
祝儀を遣一門を開ひりとくべ門戸もと見婿の轎子戸門内を  
通す以後儀家の食富によりて五十日百日二百日等かず○此夜婿の方よと女家よ二度の書翰を以  
初度ハ迎み轎子戸をすとく書翰二度戸へ支度あつたと云書翰  
三度戸へ合承色の近取遣ちとく書翰あり女の家半町程もとく  
媒人の懷中より初度の書翰を生し拜画ふと使の者ふ持せつ  
かせば女家より返しと主人門前近道ひみ出か

男家迎娶三帖式用大紅全帖絲輿恭迎四字用金簽 父或族長出名

絲輿恭

某某郡年家恭賀某姓某名端肅頃首拜

迎

速班二字用金簽

速 同前

粧

式帖道二第

式帖道三第

合巹

恭迎 同前

恭迎合巹四字用金簽

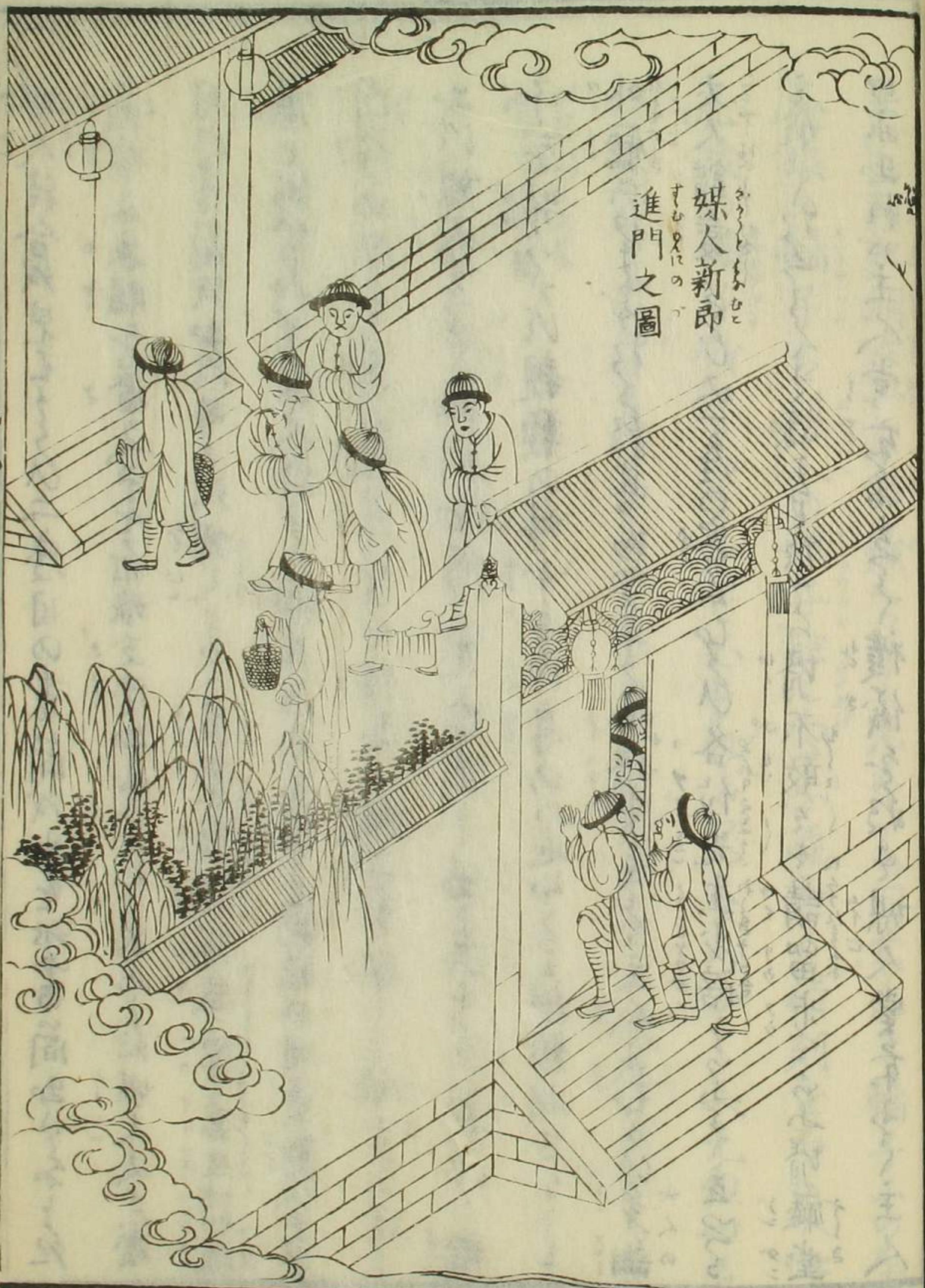
女家のサ一早前やく媒人も婿も轎子を下りて門前まで主人出で  
廳堂外案内して青上坐をましく手旗持て挨拶し媒人も今日甚る喜  
と會釈すと主人より目詣坐と立ば媒人手旗持て得罪とまく椅子に坐  
坐は背の始終媒人の跡承引添て諸事媒人の指圖み位す

花轎の新娘の内房室入室する内房は女房間也

樂人ハ廻の一間み起させむ

○

主へ自業残飯を、媒人ふ進お今晩多勞且請拜茶と挨拶正直へ媒人  
椅子を残さく茶碗を手に受取得罪多謝と會叙してえのぞく椅子  
みまへ茶代奉親類朋友など相伴の面を坐く媒人ふむひ今晚勞駕  
種勞玉成請阿と挨拶モシバ媒人立く又ねあぐく請阿恭喜々と  
あ互に手残持く逸て挨拶もみえのあく媒人ハ椅子を坐へ主  
人内み入る相伴の親戚朋友あるも椅子を坐せば奴僕を手持  
出く遠く手事を進む茶畢まで桂圓湯、扁豆湯、あひひ杏酪、鷄豆  
湯の類、砂糖煮也、一種又二種出じ畢く奴僕卓子を先媒人の手に展  
ひ見其次ふねひく卓子をもち出主人即く請うてありて夫  
子は扇上座、酒瓶をりちむく媒人の手に酒鍾、手酒代斟く媒人  
立く得罪と挨拶して酒鍾をつむれ卓子のうゑふかく主人  
相伴の面を酒代斟ぐ相伴の面とも戴き媒人ふむく請う  
挨拶す止べ媒人猪口一杯のむ相伴の面を一同みのじ其と見人  
上菜とくは儀、持手く卓子の上ふれ主人請菜とく媒人  
立く多謝とくは相伴人着紙もくく菜のよほき引をしきく  
媒人ふ請うてくは相伴人着紙もくく媒人相伴人ふ請先  
ちく先一箸吃されば背く箸紙を拂い一箸つ吃一酒をのむ  
の式賓客はるこ座中みくは因出度本残さく諱避のあくをあす  
大抵水酒寡酒あとの類代して一雙を成雙もくひ奴席を成  
席とくの類をすゝみ代きくひ雙殺代もく



○

媒人往來見もひ二度目の書簡が先と此書簡がふたと見

花娘み衣服を着てきと花娘支度出来てへと思ひて媒人又二度

因れ書簡代號此花娘媒人より多蒙盛設深感厚意且請成

席をうけられず主人翁と酒席代引く既み花娘の用意松西

内房のワカモ直か轎子にのせ僕あと轎子を舁く廳堂へ送

牛久媒人さへ親類の婦女と内房の近いに花娘の轎

子を舁ては親類の婦女と内房の近いに花娘の轎

外廳のワカモ直其のまゆく女婿もえと主人翁もい多謝

丈人錯覚よひ又一座の寄り合ひ各位先生少陪とふと立づる

これくわくと頭もとたてば婿不敢々と請留歩とひ女婿廳堂

ほれおれは主人堂本をさへ親類の禮儀を終を媒人堂本を主人

並びみ親朋朋友おに辭儀をうて先ゆから門へあゆく轎子ふのあ

花娘の轎子と媒人の轎子昇上るふ跡ゆく行列をその人所

花娘の轎子代すらもみ昇出まれどふ事へあし又先祖四只

改の宿もみ昇すまむもく子孫と執事等の儀仗代もくゆ

四只以の店

知府布政司の願

ホンテ

ナスク

紅燈

執事

駕籠

鼓樂

旺相

紅黑帽

喝道

○花娘の轎子やれどふ跡ゆく新郎

花婿と轎子もく

○男家より一丁往もふよう媒人人を遣へ嫁の來ふす

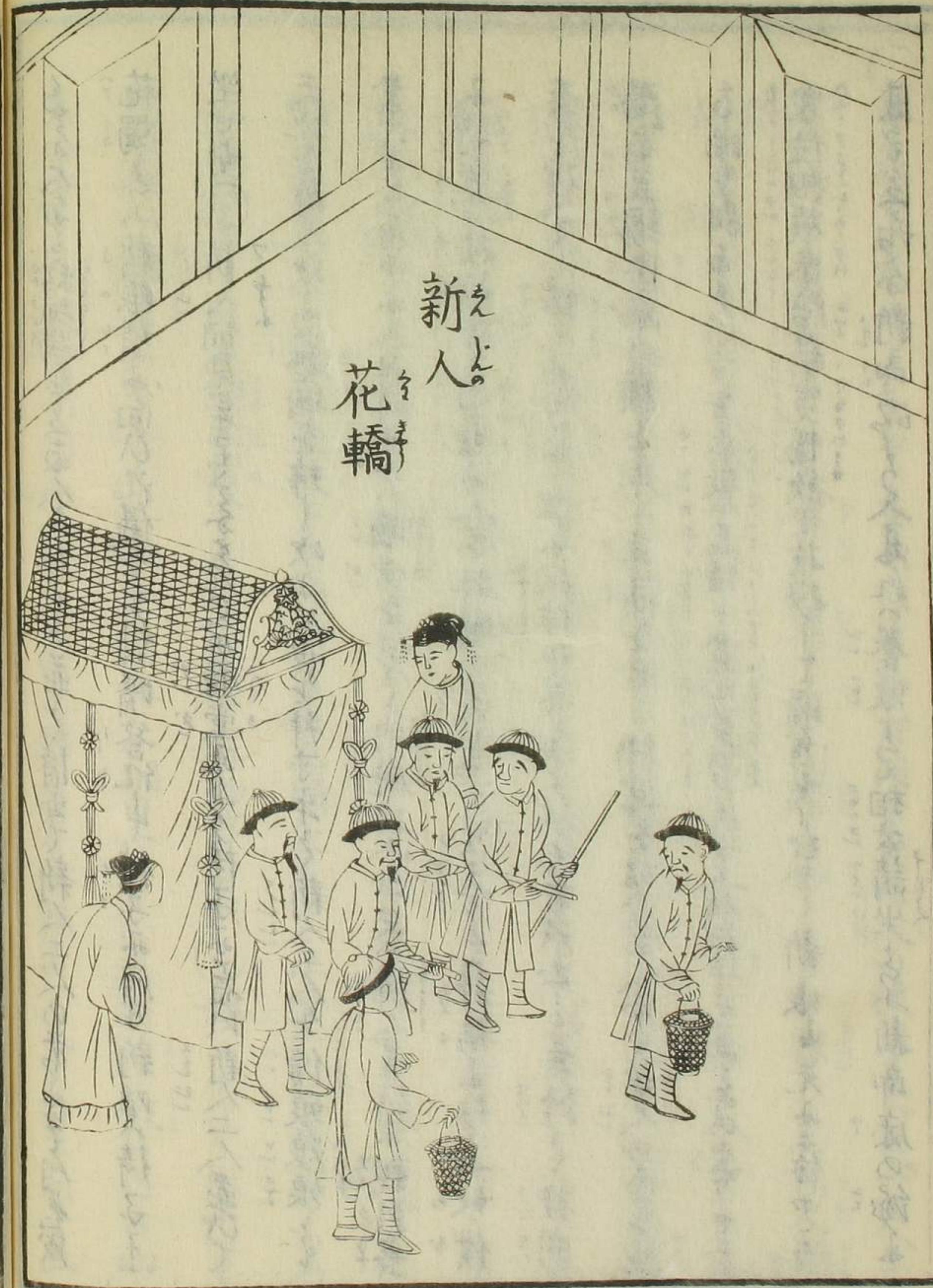
駕籠もく

○男家の門前より人を出一新郎の手を代りせし媒人の使奉とへ立ふ内へ  
らす内にも用意して主人媒人の途にて門際と坐くを掛けし媒人轎  
子とも下りて主人の手を下りて主人勞駕と云媒人豈敢と答主人先も主事  
肉にて廳堂みどりまゝよう請上坐りと云媒人不敢當と答主人再々請謂  
堅りと云媒人得罪と云椅子みどり守此時み主人並背肉小へふ其  
向ふ新娘の轎子來れ傍娘娘の隣新娘を轎子より近廳堂のほゞ傍  
娘等両方より手残引く媒人の次みえし養娘等傍母付添養娘ハ乳母ニ花  
娘の衣裳の下に披風袂衣と云格常の衣服を着一上み大紅の圓領より  
上着代着一頭み頭面覆と云紅の被やの物代着にムイジ媒人等く肉みづ  
婿を伴ひ廳堂みどりまゝ花娘を新郎と相見せしむ此時親戚の内に幼  
年のかた又ハ奴僕の内みく二人一對の燭臺并金銀みて色くの茶花を西  
坐せし〇新人相見早とくかとて又母廳堂みよう椅子みどり是成  
天地を拜一一次自家廟を拜一一次父母を拜す早とく新人二人並びて  
業内にて房中み入此跡み母へ廳堂を立く内廳に入ふ又ハ媒人并びに親類客  
小請寛と挨拶して内廳み入ふ外廳の客あく坐定とて詮語ふねく奴僕  
茶葉を持ちて媒人みどり先次も相伴の客あく坐定とて詮語ふねく桂圓  
湯扁豆湯杏酪の願を出一卓子を出一酒宴を始む主人坐く媒人の不景を取  
る酒を斟あくにしうを奉敬一盃種々費心多勞々々と挨拶して其外の客を取  
衆位相煩奉陪請寛暢飲と挨拶して酒成すひ〇新娘を先小房中不  
まつて立若か新郎改めう入られへ養娘とて相公請坐とて新郎床の邊

女婦送出  
内房之圖



新人  
花轎

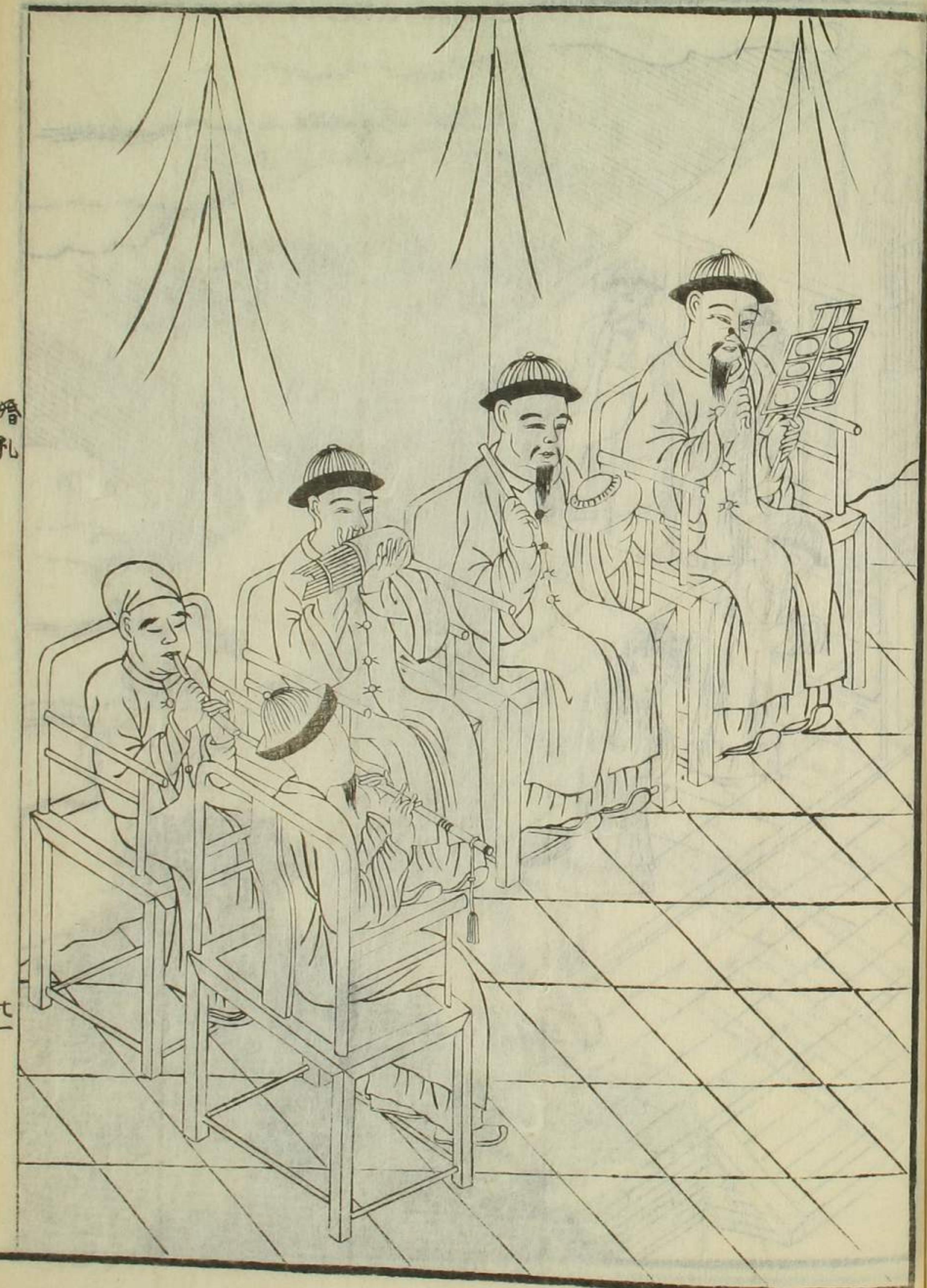


腰を掛け此の妃傍娘新娘を伴ひ同席せりや傍娘合巹盆を持ちて二  
小刻く手にもち了鬟等酒瓶の酒を役よく二の盃もくせらもく盃に  
移し合せく新人二人み一時小刻ひ是を合巹もく 飄あゆみの金銀多く遣  
合巹平て始く花娘の頭面覆をもく圓領を脱せ天青色の色也是ハ清朗の吉  
色ゆく男子の事に括す筆致也先祖も太子とぞ  
たぬりもか半は庶民とくも其母あらひは親  
類の婦女姉妹の顔容未だ詮活して盛事あり新郎も合宿せば詮半傍娘  
養娘も合宿に○外廳小間人其外の客酒宴未だも其上扇を拂ふり其と見母あらひは親  
管家下部の内事もく代よりもく紙もく張ゆきにまくらまか獅子を持ちて廳堂の坐  
あくに居玉が衆客酒宴未だ争て獅子はもをとて足跡を石で落し分取  
みそめ ○ 墓外廳の窓も陪坐せば天地廟拜もんで墳外卧房も入る御之朝  
の酒席も陪坐に墳一人卧房も入る酒宴四時胡までみあづむ望日樂人も盛ま  
里ても燭臺も蠟燭を點じたゞらねじある夜も入る酒席をもく 第二日也  
○ 第二日同みる花娘早くねれて父母の居向みゆきく拜し房中も入る御飯を吃  
て此日より親類朋友都來道喜す親類朋友より慶賀貢物を贈る物而して何事も  
謝帖を候すか也候の者小へ貴封をもくらひ 婚礼の日も送るも  
婚儀済く二日目あらひ五日同裡小婿の方より請帖を候く外父外母を招  
請帖ハ文の名を以て入此日も酒宴をりふき

婚札

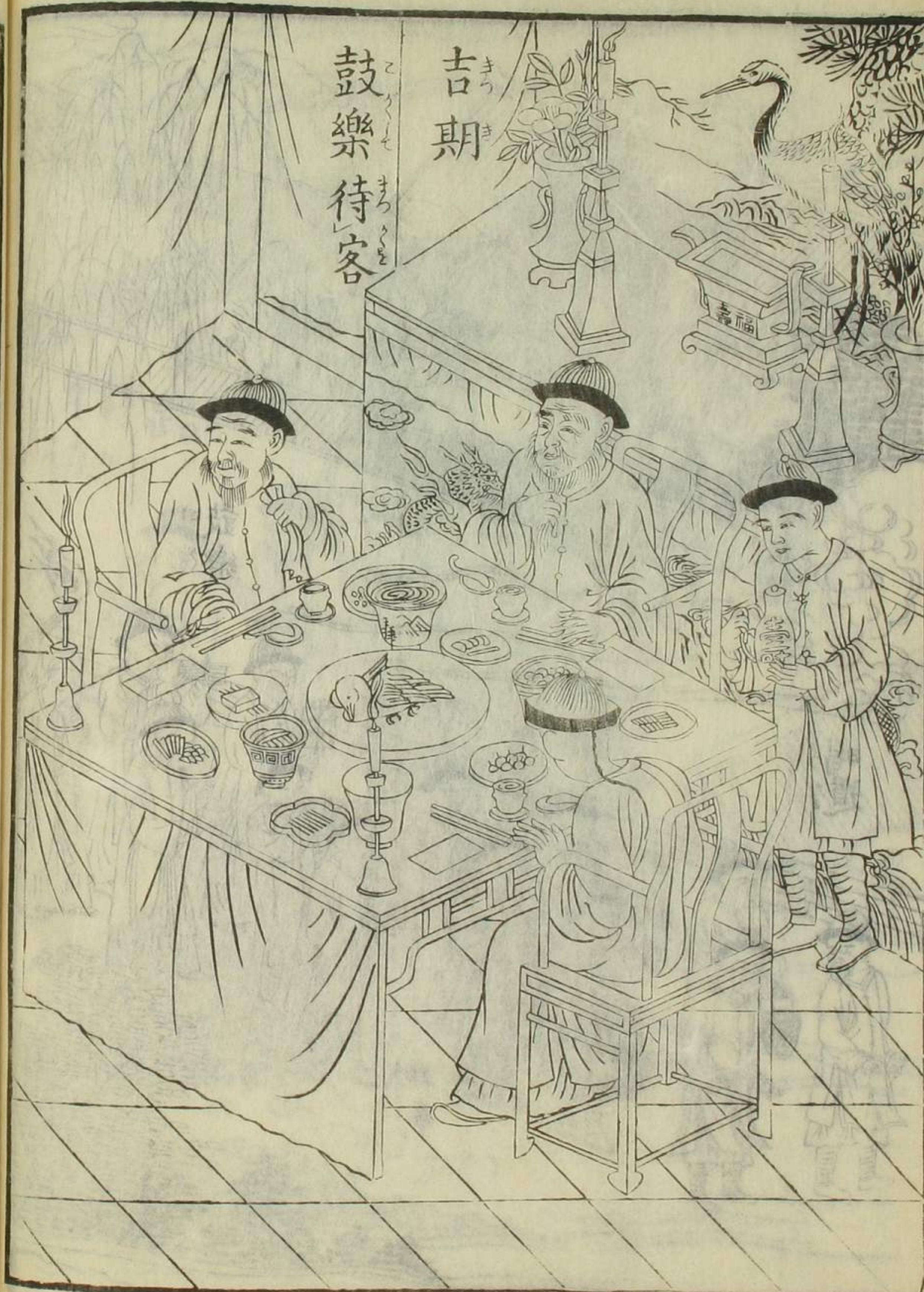
二十

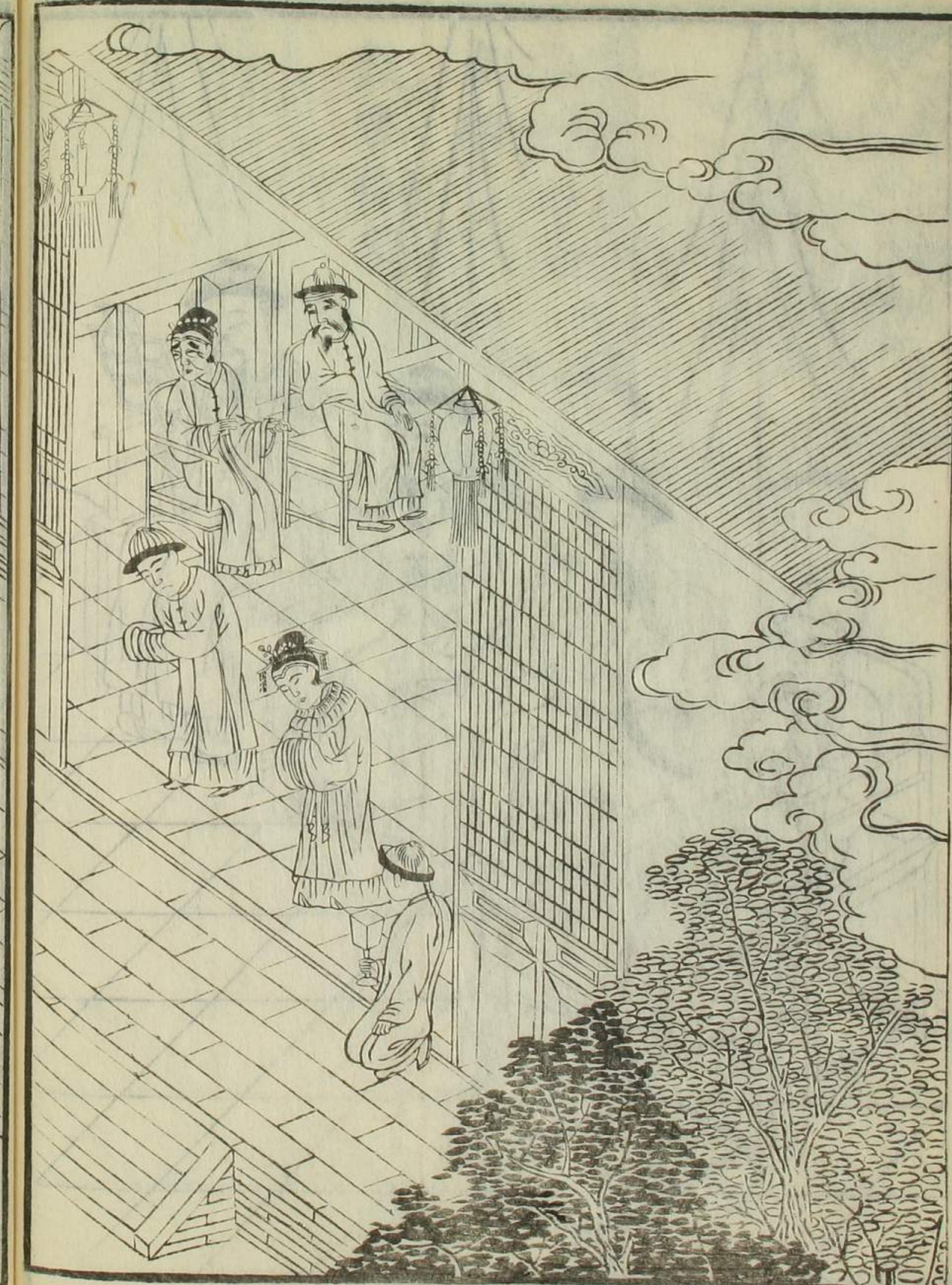


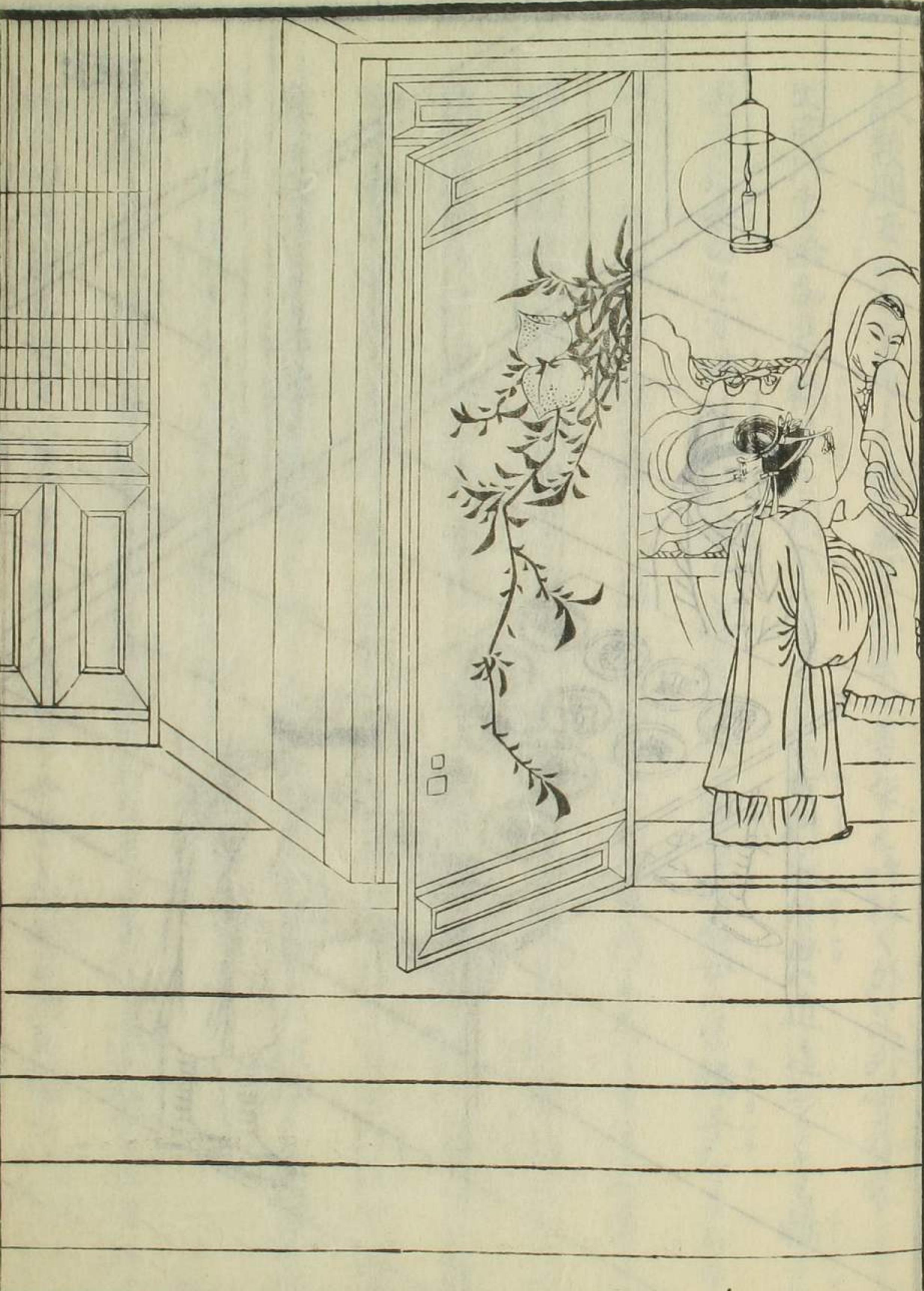


吉期

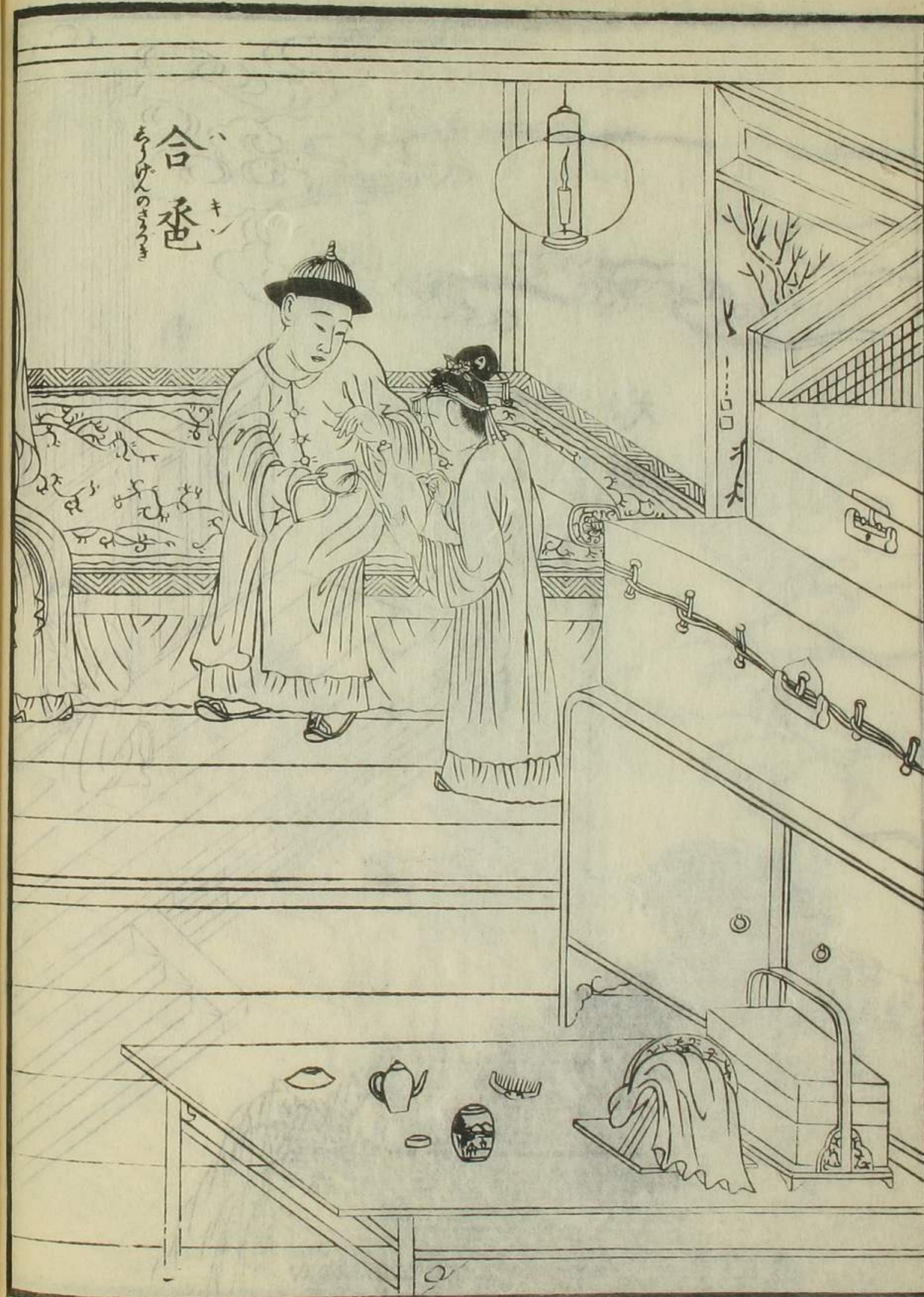
鼓樂待客





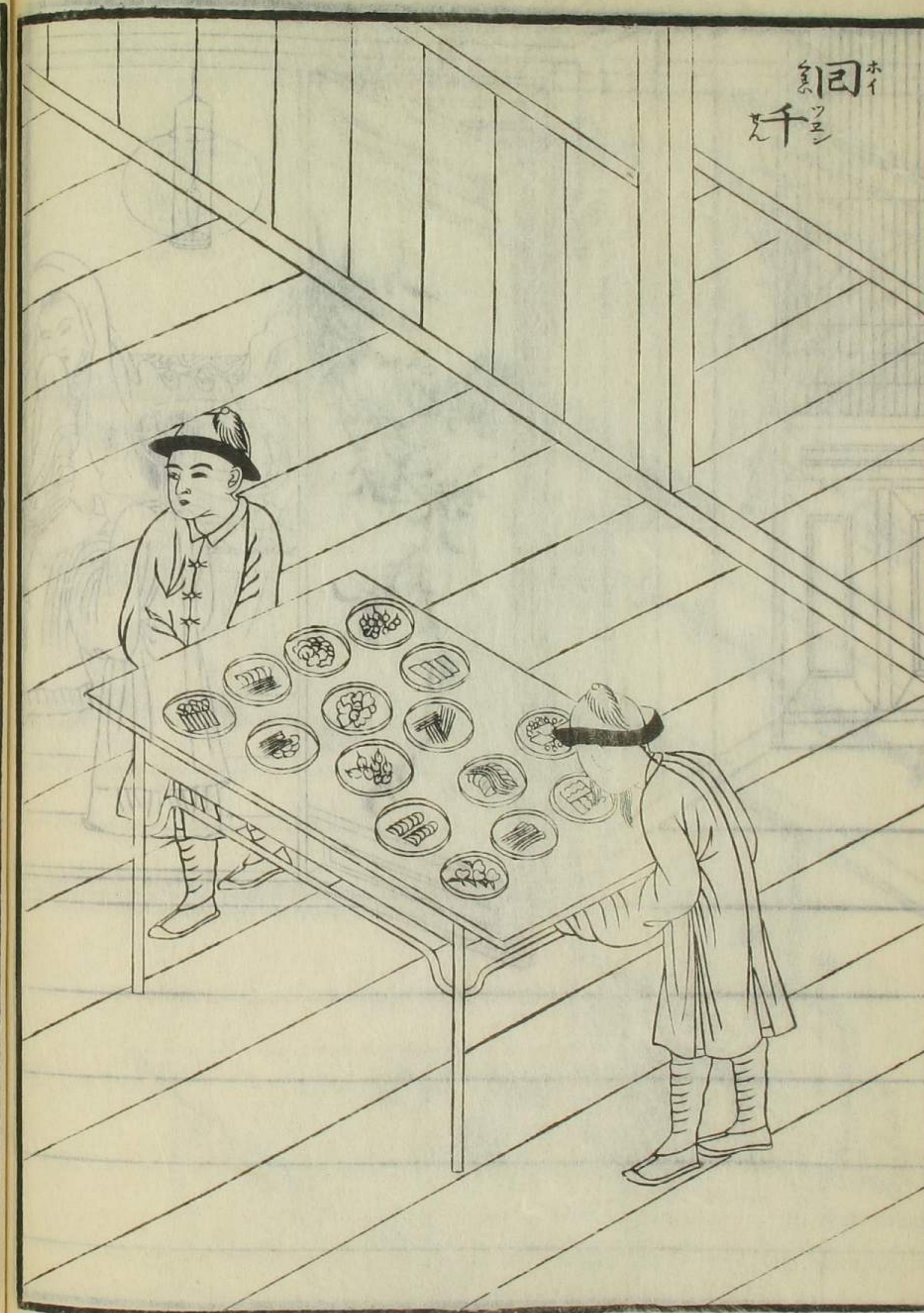


合巹  
きくわのまつり



同

千



親類朋友を案内して饗食應す又樂人等をも呼ぶ外父外母暮景より  
生完に至るあ止バ轎子を用ひ近きよりへ歩行モ外母の近邊ありとも轎子を  
用ひ花娘の兄弟姉妹も亦速く婿のうへ一同小舟か女は召轎子をりらず  
○婿の門前より下郎の者うちかひ外父外母れ來ら城内來らす主人並  
婿多廳堂のにはゆく門限と出ゆひを拱あ主人よも敢勞移玉らふ  
客豈敢々と名ふ主人案内して廳上承取る堂客すべてかを養娘の顔  
如く廳上坐て延びてまことに其間を養娘の顔花娘を伴ひ坐く堂  
客承接候して内廳み伴ひゆく○主人も外父小舅等承接候して椅子に  
坐せしむ婿の下座のよに手を拂ふ拂ふ  
内廳み花娘の兄弟妻女並み姊妹ちふも卓子を出一食歎す相伴  
婿の姊妹並み兄弟妻女を陪坐す母やく外母み酒を勧ひ  
吉朝と曰く

○酒宴添更おれんで寄りを接拶せば主人も役合を見合く席を納  
 ○進門もみく教日みて舅代をすと婿を招請する牛車に此時新娘も伴  
 ひ乃見を田門とす此方の里がまきまき ○婿舅方れ門小入はべ舅父廳堂  
 里出むし業内を婿廳堂ゆかく下座のかみを掛けおふ丈人請坐  
 そへ婿辭讓して不敢と答へて坐せば丈人強く請坐おう我也要坐おう  
 そへ婿得罪あるよ人アリ主席お坐せば婿も坐候親戚朋友ある生高  
 婿承前面を婿乞て遠く辭讓して請坐アリトドキアリトドキアリ  
 ○花娘ハ轎子カツコにゆき内廳口まで歸るを駕子カツコよりうて養娘あと身添  
 内廳メイテン小入ふ ○内廳メイテン小へ嫁の母をほシ姉妹姑の顔までも相伴して嫁了  
 食應エイヨウに又折ハサウありて酒を勧む外廳の酒宴奉坐内廳メイテンも見入坐て  
 酒宴を收む婿立アリ夫人ヒラタ嫁アリ一聽アリ内廳メイテンも嫁アリ  
 青姊妹も辞儀して外廳メイテン小坐至外廳メイテンに轎子カツコにあり養娘あと付  
 そひて門を出る ○婚姻の後一月程もろて嫁親里カミノシロ小帰省する半多  
 此時人事とて是く贈物ゼンモト有アリ 萬物時新の物或ハ親里の財物等  
 迎來まで帰る此くは舅の方よりもねうつ物モノ古の帰寧の遺リ  
 かひ其のちまふ伺ひ義理ヨウリおまかれてそく因取ウチタケをうそぞあ宴イニ  
 の方お返事アリして其日にひりて公姑コクジおまかれて親朋朋  
 友よも花娘成招請アリセテ牛車ウチバ一月半の正月カニツわらひと齋延セイエンあるの  
 ばかりにまゆく驚き嫁アリと妻アリへあー

清俗紀聞卷之八

紙獅子

